中華民國

百年史

張玉法 著

108
3
140

108
3
140

文學士原勇六編纂

中等教科

西洋史

東京
文學社

凡例

一、此書は、東洋史に對して、主として西洋列國の事蹟を說くものとす。

二、此書、前半に簡にして後半に繁、是れ重きを近きに置くの旨に出つ。且つ其中等教科用書たるか故に、往々斟酌を加へたる所なきにあらず。

三、此書、既に教科用書たり、卷帙の浩瀚に便ならず。故に、逸話、言行の類、悉く之を割愛す。且つ紀元は、凡て西曆に據る。東西對照の如き、亦歷史の趣味を加ふ。教師に須つこと多し。

四、此書の記事、成るへく其源因を尋ね、其結局を究めて、事實の關係を明にせんことを務む。而かも其事實の瑣細に至りては之を畧す、繁冗を避くるなり。

五、西洋の歷史は、愈〻近くして愈〻東洋の事と交渉を密にし來る。而して今日の列國大勢の由來する所を繹ぬる、現世史の要や頗る大なり。是れ此書の、特に現代に詳にして、從來の歷史の、多く古に詳にして今を畧すると稍〻其體を異にする所以なりとす。

六、歴史を以て、アリアン民族の獨舞臺と信せるは、西洋人の偏見のみ。此書は、普通の西洋史か輕忽に附せる東洋民族か、西歐の史壇に於ける所作に關しては、之を記して畧、備はらんことを務めたり。

七、此書、生徒の記憶に便せんか爲めに、多く日時、人名の類を省く。且つ務めて毎章前後相呼應して、事蹟を關聯せしむ。

八、名詞の發音の如きは、主として英語に從ふ。生徒多數の修むる所によるなり。

九、古代史の如き名詞の綴字、書によりて形を異にするもの多し。教師の留意して、生徒の惑を來さゝらんを務めんことを欲す。

十、此書、編纂に際して、國府種德、田岡佐代治二氏に負ふ所多し。玆に其勞を謝す。

明治三十年九月

編者識

中等教科

西洋史卷一目次

總論　一丁

第一篇　太古史

古代東洋諸國

第一章　埃及　四丁

第二章　フェニシア人　五丁

第三章　ヘブリュー人　六丁

第四章　アッシリア　八丁

第五章　バビロン　九丁

第六章　波斯　十丁

第二篇　上古史

希臘史

總說　十二丁

第一章　波斯入寇以前希臘の狀態
（一）上代　十三丁
（二）人種の遷移　〃
（三）國祭及ひ二强府民の風尙　十四丁
（四）スパルタの勃興　十五丁
（五）アゼンスの勃興　十六丁
第二章　波斯戰爭以來希臘の狀態　十九丁
（一）波斯戰爭　〃
（二）アゼンス極盛時代及ひスパルタとの軋轢　二十一丁
（三）ペロポンヂサス戰爭　〃
（四）スパルタの覇業　二十三丁
（五）セベスの覇業　二十四丁
（六）希臘文藝の最盛期　二十五丁
第三章　マセドン盟主時代　二十七丁
（一）ヒリップ及ひアレキサンダー王　〃
（二）アレキサンダー帝國の分裂　二十九丁
(1) 埃及　〃
(2) シリア
（三）アレキサンダー王時代の文華　三十丁
第四章　希臘の衰微　〃
羅馬史
總說　三十三丁
第一章　羅馬の勃興　三十五丁
第二章　羅馬隆盛時代——外國征略　三十六丁
（一）ピューニック戰爭　三十八丁
（二）羅馬の風尙及ひ文華　〃
第三章　共和時代　四十丁
（一）內訌　四十一丁
（二）ポムペイウス　四十三丁
（三）第一三雄同盟及ひシーザー
（四）第二三雄同盟

目次

第四章　帝政時代　四十四丁
（一）オーガストス　〃
（二）耶蘇教の傳來　四十六丁
（三）オーガストス朝の末世　四十八丁
（四）當時羅馬の開化と道德　四十九丁
第五章　羅馬の衰運　〃
（一）武人政治及びコンスタンチン帝　〃
（二）耶蘇教の傳播　五十一丁
第六章　蠻民の移住　〃
總說　五十三丁
（一）匈奴の侵入　五十四丁
（二）西ゴス王國　〃
（三）匈奴王アッチラ　五十五丁
第七章　西羅馬の滅亡

終

中等教科

西洋史卷一

文學士　原勇六著

總論

世界文明の大勢は、もと東西兩洋人種の主動する所に係る。而して東西兩洋人種は、各其方面を異にし、その發達を同しくせず、二者の間、相隔離して相渉らさるもの久し。其これありしは、西曆紀元後千六百年代（皇紀二千三百年代）の頃に始まれり。故に、兩人種共に、世界の大局に重大なる關係を有すと雖も、相關聯して之をなしゝに非されは、兩人種の歷史は、各別に之を說述するを當れりとす。

東洋人種か、其東洋の局面に於て、所作せし發達の記錄を稱して東洋史といひ、西洋人種か、其西洋の局面に於て、所作せし發達の記錄を西洋史といふ。

東西兩洋史の關聯

今茲に說述せんとするものは、即ち此西洋史なり。

かく古來東西兩洋人種か相關聯して、世界の大勢に關はりしこと、殆と絕無なりしと雖も、中世紀の末より今世紀の初めに方り、航海の術開け、冒險の徒輩出するに至りて、從來別天地をなしたりし、兩洋間の交通漸く開け、是より以後、世界の大勢は、二中心の關聯によりて動かさるゝに至り、兩洋人種か相關はり相涉る複雜なる現象を呈するに至りぬ。故に東洋史を說かんにも、勢西洋諸國との交涉に及ほさざる可からす、西洋史を說かんにも、必す東洋との交涉に及ほさざるを得す。譬へは、中世紀以前の歷史は、車輪の各、別に動くか如く、今世紀以後の歷史は、兩輪共に動きて進行するか如し。かく東西兩洋の人種か、共に動きて世界の大勢を支配するに至りしと雖も、猶二者共通の一中心點を有するにあらすして、依然として其中心とする所を異にすることを忘る可からす。

東洋の人種とは、所謂蒙古種(Mongolians)にて、西洋の人種とは、重にアリアン人種(Aryans)を指していふなり。故に、東洋史には、主として蒙古人種の興亡盛衰を說述し、西洋史に於ては、主としてアリアン人種の興亡盛衰を說述す。然れとも、此アリアン人種の文明の淵源は、遠くセミナック族なるアッシリア人、ハミナック族なる埃及人等に關繫を有すれは、西洋史を說述せんには、溯りて上古の埃及、アッシリア帝國の興廢より說き來らさる可からす。

人種の五大別

博言學上より之を論すれは、古代亞細亞に於ける、印度及ひ波斯の二國民も、またアリアン人種に屬すへしと雖も、今歐羅巴に於ける、此人種のみに就ていふときは、之を五大別して希臘人種(Greeks)、拉丁人種(Latins)、日耳曼人種(Germans 即ちチュートン人種 Teutons)、ケルト(Celts)、スラヴォニア人種(Slavonians)とす。而して之を現時の歐洲列國々民に配すれは、希臘人の希臘種たるはいふ迄もなく、佛蘭西、伊太利、西班牙、葡萄牙等の國民は、拉丁人種に、日耳曼、和蘭、英吉利、瑞典、諾威、丁抹等の人民は、日耳曼人種に、英吉利の一部アイルランド、スコットランド、

ウェールス等の人民は、ケルト人種に、露西亞、波蘭（ポーランド）等の人民は、スラヴォニア人種に屬す。左の如し。

アリアン族

- 希臘種
  - 希臘
- 拉丁種
  - 佛蘭西
  - 伊太利
  - 西班牙
  - 葡萄牙
  - 和蘭
  - 英吉利
  - 瑞典
  - 諾威
  - 丁抹
  - ウェールス
- ケルト種
  - アイルランド
  - スコットランド
  - ウェールス
- ナユートン種
  - 日耳曼
- スラヴォニア種
  - 露西亞
  - 波蘭
- 波斯種
- 印度種

西洋史の區劃

西洋史に在りては、此等人種の發達、盛衰、興亡等の蹟を說述するを以て目的とす。

太古は、邈焉として窺ひ知る可からす。有史以來、上下茲に四千年、其氣運の變遷に從ひ、假に之を別ちて五となす。即ち太古、上古、中古、近世及ひ現世是なり。太古史は、最古時代より波斯王の希臘侵略に至り、上古史は、波斯王の希臘侵略より西羅馬帝國覆滅に至り、中古史は、西羅馬覆滅より新世界發見に至り、近世史は、新世界發見より佛蘭西革命に至る。而して現世界は、佛國革命より現時に至るまてとす。

第一　太古史　最古時代より波斯王の希臘侵略（紀元前四九〇年）迄

第二　上古史　波斯王希臘侵略より西羅馬覆滅（紀元四七六年）迄

第三　中古史　西羅馬覆滅より新世界發見（紀元一四九二年）迄

第四　近世史　新世界發見より佛國革命（紀元一七八九年）迄

第五　現世史　佛國革命より今日迄

歷史の脈絡

此の如く年代を區分したりと雖も、畢竟漠然たる任意の事にして、唯氣運變遷の一斑を知るに便するのみ。世代は連綿、歷史は一帶たることを忘る可からす。

要するに、太古に於ける諸國民の文明は、注きて希臘に入り、こゝに鎔化せられて、今日歐洲文明の端緒を開く。波斯王の希臘侵略は、實に希

臘隆盛の機をなせるもの、太古史こゝに終りて、文明の曙光始めて歐洲の東端を照したる大勢の第一轉たり。希臘衰へて羅馬興り、天下の權勢茲に集中す。西羅馬の覆滅は、此集中せる權勢を全歐に分散せるものにして、之を大勢の第二轉とす。是より列國勃興、中原に馳騁し、その狹きに過きて角逐に餘地なきや、去りて新天地の廣濶をもとめて、亞米利加の發見となり、大勢三轉して新精神を鼓吹し、民主自由の風潮となり、從來列國間の競爭は、變して一國内に於ける君民の衝突となり、發して佛蘭西革命となりて、大勢四轉し、一國の主權は上より下に遷るに至り、一時全歐を震蕩せし波瀾漸く定まるや、列國間の競爭舊に復し、更に新天地をもとめて、亞細亞に相爭ひ、又既に亞非利加に及へり。今日の形勢は、全世界を擧けて、大勢の渦中に投したるもの、今日以前に在りては、東西其歷史を異にせしと雖も、今後の歷史は、それ全世界を包含せる世界史たらん歟。以下次を逐うて當に說き及はすへし。

第一篇　太古史

古代東洋諸國

第一章　埃及

太古人類の發達せる由來を稽ふるに、文華の最も早く開けたるは、氣候温和にして風土其宜きに適ひ、衣食住を得るに最も利便なる處にあり。かゝる地方に於ては、人民一定の住居を占めて、耕作に從事し、遊牧遷移の生活を要せざるか故に、種族自ら蕃殖して、文華の基を開くに至るものなり。今遠く有史時代の初期に溯りて、これを考ふるに、紀元に前んすること凡そ二千五百年の頃、世界の各所にありて、其文華の中心となりしもの、五個處あるを見る。即ち支那、印度、メソポタミヤ、埃及及ひ中央亞米利加是なり。而して此五文華、初め相離れて各、單獨の發達をなせしと雖も、文華の進歩するに隨ひ、漸次其範圍を擴張し、相撞着聯接して、遂に一個團體を形成するに至る。是れ實に世界發達

の通勢なりとす。今吾人か叙述せんとする西洋上代の歴史に於て、其文華の本源となりしものは、埃及及ひメソポタミヤなり。

埃及開明の因

埃及は、亞非利加の東北部に位し、ナイルの大河其中央を貫流す。此河は、毎年夏期に至れは、河源を爲せる山岳の積雪の融解と、霖雨とにより、河水漲溢して其兩岸に漑き、その流下し來りたる沃土を遺して退くを以て、その沃土、年々堆積して、地味極めて豐饒となる。埃及か四境蠻野の間に在りて、夙に文華を發生したるは全く是か爲めなり。かく埃及は、專らナイルの漲溢によりて、存立するものなるか故に、從て此水を疏通して四方に分ち、若くは退水後、土地の區劃を爲すに、王者の權を要するを以て、王權おのつから發達し、埃及王は、日の御嗣(Pharao)と稱せらる。蓋し埃及人は、此河水の漲溢を以て、全く太陽の致す所と爲せり。これその宗教に於て、最も太陽を信仰する所以なり。其紀年の法は、洪水の始まる時即ち七月を以て年の始めとし、また此の如く國土の肥饒なるを天祐なりと信じて、殊に僧侶を崇奉し、人民の階級は、四種に分れて、僧侶最高に居り、武士之に次き、商工これに次き、農最下に居る。要するに、皆ナイルの水利の影響より起りたる風習に外ならざるなり。

二文華黎明の初期

埃及建國の年代は、漠として知るに由なしと雖も、紀元前二千七百年の頃、メチス王(Menes)始めて都を中埃及のメンフィス(Menphis)に奠め、爾來相承けて全國を一統し、殖産を圖り、土工を興して、國利の増殖を務めたり。有名なる金字塔(ピラミッド)の建てられたるも、實に此間にありとす。其末葉に至りて、政令亂れ、强族割據、遂に其權勢、殆と全く上埃及のテベス王朝(Thebes)に歸したりしも、亦久しからずして衰へ、紀元前二千一百年代の頃、セミナック種の游牧の民、北方より埃及を襲ひて、ナイル北岸の地に割據し、遂に延て中央および下埃及に及ひ、大に虐政を施し、埃及舊時の文華、殆と破壞せらるゝに至れり。是れをヒクソス王(ヒクソスHykso は牧者の義なり)と曰ふ。

千六百五十年の頃に及ひ、ヒクソス民族の柔弱に流れたるに乘じ、テ

ペス王アーメス一世(Aahmes)興りて、之を國外に逐ひ、更に北東に進みて、其版圖を擴張せんとするに及ひ、始めて、メソポタミア(Mesopotamia)と撞觸せり。時に千六百年にして、是を二文華衝突の初期となす。此時に當りて、埃及は中興の勢甚た盛にして、内には殖産工業を奬め、外には屢、シリア、アラビア(Arabia)を侵し、其大半を蠶食して、國威を輝かせり。爾來殆と三百年間(紀元前一五二五ー一二〇〇年)は、埃及全盛の時代にして、其勢威西方亞細亞地方を壓倒せり。

此時ヘブリュー人(Hebrews)及ひフェニシア人(Phoenicians)は、早く既に埃及と關係を生するに至れり。

第二章　フェニシア人

フェニシア人は、地中海の東岸に瀕せる一小偏地に住して、海運を業としたるか爲め、埃及の如き富國と同盟するは、大にその利とする所なりき。蓋しこれによりて、地中海濱の貿易、交通の權を握るを得、また其信仰せるバアル教(Baal)を弘布するの便を得たり。バアル教は、日月星辰及ひ天地を拜する一種の宗旨にて、當時シリア及ひメソポタミア等に盛に行はれたるものなり。又フェニシアの海運の隆盛を致したる所以は、其使用せし文字の聲音によるものなりしか爲め、大に交通の便を助くるものありたれはなり。

既にして埃及漸く衰へ、紀元前千三百五十年の頃に至りては、全く縮退して、勢威國外に及はす、僅に蘇士(Suez)の地峽に嬰りて、外敵を禦かんとし、國内に令して、其工事に從はしむ。特にヘブリューの民は、近く此處に住せるを以て役せらるゝこと最も酷を極めたりき。

第三章　ヘブリュー人

ヘブリュー人は、もとカルデア(Chaldaea)に住みたりしか、紀元前凡そ二千年の頃、其族長アブラハム(Abraham)之を率ゐて、レバノン(Lebanon)山以西瀕海の地に住せる、カナアン(Canaan)人種の中に居を占めたりしも、其信する所の宗教を異にせるより、爭鬪絶えす、後、埃及王に庇護せられ、遂に移りてナイル下流の東岸なるゴスヘン(Goshen)に居住せ

モーゼスの開宗

り。然るに、埃及の勢力衰頽し、遂に蘇士に嬰りて、外敵を禦かんとして、之に壘壁を築くに當り、ヘブリユー人を驅りて、其役に從事せしめたりしか、此時埃及人の待遇苛虐を極めたりしかは、モーゼス(Moses)出て、奮て之を救濟せんとせり。モーゼスは、ヘブリユー人にして、而かも埃及の教育を受けたるものなり。遂にヘブリユー人を率ゐて、埃及を去り、紅海を渡り、パレスタイン(Palestine)に至り、終にこゝに居を定めぬ。時に紀元前千三百二十年なり。モーゼス此處に於て、自ら宗教を創め、其民に惟一の天神を信すへきことを敎へたり。

蓋し此時ヘブリユー人は、十二種族に分れ、(アブラハムの孫ジャコブ Jacob. 即ちイスラエル Israel の子の十二人より分れ來りたるものなりといふ)且つ漂泊の人民なれは、國家の組織といふへきものもなく、單にモーゼスの威望に繫かれて、相一致せる家長的の制たるに過きさりき。

是より先き、モーゼスは、アラビアの沙漠に漂泊すること四十年、後パレスタインの境に至りて死し、其子ジョシュア(Joshua)父の志を紹きて衆を領し、カナアン族の內訌に乘して其大半を蠶食し、これを其十二族に分ち、祭政一致の政體を以て其上に君臨せり。然れとも各種族の結合鞏固ならす、加之ならずパレスタインの一部に、ヒリスチイン人(Philistines)フェニシア人の割據するありて、動もすれは來り寇すこと絕えさりき。而かもモーゼスの威望の、人心に浸染せるや猶一縷の人心を繫くに足るものありて、その國の危殆に瀕する毎に、義人踵て出て、一時の人心を收攬し、外敵を禦きて、國運を支持するを得たり。之を士師(Judges)の時代といふ。

士師の時代

高僧サミユエル(Samuel)出つるに及ひて、よく各種族を合同するを得たりしも、家長的の制の、到底一國の統一をなし得へからさるを以てヘブリユー人等、サミユエルに迫りて、君主を立てんことを乞へり。因りて千〇五十五年、サウル(Saul)を、十二族中のベンジヤミン(Benjamin)なる一小族中より選ひて王とせしに、サウル勇敢にして、四隣の蠻族

ヘブリユー人王を立つ

ヘブリユーの盛時

を伐ち、再ひ國力を回復するを得たりしか、フィリスチイン人との戰に戰沒したり。

サウルの意は、其位を世襲せしめんとするにありしも、サミユエルは、之を喜はす。また猶太(Judah)族の中よりダヴィッド(David)を選ひて王とせり。ダヴィッドは、勇敢にして、善くフィリスチイン人の侵掠を遏め、西方亞細亞地方を壓服し、更にゼルサレム(Jerusalem)を略して、こゝに奠都し、一時其國疆、紅海の東北岸よりユーフラテス(Euphrates)河に達し、當時商業上首要の都府たるダマスクス(Damascus)も、亦其手中にありき。此王の治世をヘブリユー最強盛の時代なりとす。

ダヴィッド死して、其子ソロモン(Solomon)繼く。ソロモン、亦明達にして治を圖りしも、ゼルサレムに宏大なる宮殿堂宇を建てゝ民力を罷ちし、又親ら埃及王等と姻親を結ひ、外教の禁を弛めしより、民心漸く睽離し、其死するに及ひて、北方なる十族は、王家に背きて、別にイスラエル王國を建て、サマリア(Samaria)に都せり。其留まりて王家に隷せるものは、唯猶太及ひベンジヤミンの二族のみ。是より國内分れて、猶太及ひイスラエルの二王國となれり。(紀元前九五三年)爾來二國間に宗教上の爭絶えす、國勢これが爲めに大に衰へ、ダマスクス及ひパレスタイン北東の諸族漸く獨立し、また屢埃及人の侵略を被れり。時にアッシリア人(Assyria)東方に勃興して、大局將に一變せんとす。

アッシリアの建國

第四章　アッシリア

アッシリア人は、メソポタミアの北半を占めたるセミナック族の一派にして、古代文華の第二中心たるものなり。初めカルデア國ありて、紀元前二千五百年の頃、ユーフラテス及ひチグリス(Tigris)兩河畔の地に起り、紀元前二千年の頃は、隆盛の頂上に達せり。後紀元前千二百年の頃に至りて、チグリス上流の地にあるアッシリア人、獨立して、一王國を建てたり。これをアッシリア人勃興の始めとなす。

元來此アッシリア人は、常に四邊の蠻族と相爭ふにより、軍陣の事に慣る、其宗教にも、其信奉するバアル(Baal)神の外、更に其特有なるアシ

ユール(Azur)軍神を信するを以ても、其戰を好むことを知るへし、此の如くなれは、國威强く、四方を征して、國力大に進みたり。紀元前九世紀の半に至りて、アシユール、ナシール、ハーバル(Assur-nasir-habal)の出てゝカルデアを滅ほし、次てメソポタミアの全部を略し、又メディア(Media)の大半を蠶食せり。紀元前第八世紀に及ひては、此國の勢威紅海沿岸の諸州を壓し、フェニシアの諸府は風を望みて皆降り、ヘブリユーもまた危殆に逼れり。

時にヘブリユー種族の二國は、猶内に相鬩き、七百四十年の頃に至りて、イスラエル國は、ダマスクスと兵を合して、猶太を伐たんとせしより、猶太王は、援をアッシリアに請ひ、且つ歲幣を納れんことを約す。是に於てアッシリア王ナグラス、ピレサル(Tiglath Pilesar)兵を以て來り援ひ、大にイスラエル、ダマスクスの聯合軍を破る。これによりてヘブリユーの二王國及ひダマスクスは、歲幣をアッシリアに納れて之に隷屬せり。後イスラエルは終にアッシリアの版圖に入り、猶太は埃及と結託して、叛を圖り成らさりしも、幸にしてアッシリアに内亂生せしかは、僅に滅亡を免るゝを得たり。

アッシリアの盛時

アサル、ハッデン(Asar haddon)の時に至りて、アッシリアの國運極盛に達し、其疆域はナイル河より東はイラン(Iran)沙漠に達し、北は裏海より、南は波斯灣に至り、メディア(Media)、メソポタミヤ、シリア、埃及等の諸國、悉く其版圖に入り、アッシリア王は、王中の王と稱せられき。

アッシリアは、かく廣大の版圖を有せしと雖も、悉く王に直隷せるに非す、各國をして各、其故王を奉戴せしめ、敢て之に干渉せす、唯歲貢を納れ、アシユール神を信するを强ひしのみ。されは統一の實を缺き、結合の力甚た强からす。紀元前第七世紀の半に至りて、メディア先つ叛き、バビロニア(Babylonia)、埃及之に次き、遂にメディア、バビロニア相結ひて首府ニチベ(Nineveh)を陷れ、アッシリア國遂に亡ふ。時に紀元前六百〇六年なり。これよりバビロンの勢、日を追うて漸く大なり。

第五章　バビロン

バビロンは、カルデアの故地にして、メソポタミヤの南半にあり。久しくアッシリアに屈從したりしか、メディアのアッシリアに反するに及ひ、バビロンの代王ナボポラッサル(Nabopolassar)も亦獨立して、遂に一王國を剏む。時にアッシリア帝國は、瓦解して、諸邦皆自立す。此間に於て、よくバビロンに頡頏し得へきものを埃及とす。バビロンは東よりし、埃及は西よりして、各其疆域を擴めしかは、二國は、遂に相衝突し、アッシリアは、一たひ埃及王ネコー(Necho)の爲めに破られて、ユーフラテス以西の地を失ひしも、ネブカドネザル(Nebuchadnezzar)アッシリア王位に即くに及ひて、埃及に捷ち、舊地を恢復して、勢威甚た熾なり。猶太フェニシアの二王國同盟して、之に當りしも、終に支ふる能はすして、タイル(Tyre)、ゼルサレム等相次て陷り、バビロンの威シリアに振ひ、復にメディア、リディア、埃及等の諸州を凌きて、一時の盛を極めたり。王はまた意を内治に注き、土工を興し、都城を擴め、宮城を建て、運河を設け、橋梁を架し、其他殖産興業より、文物技藝の奬勵を務めたり。紀元前五百六

バビロンの頡頏

十一年、王の沒するに及ひ、闇主相嗣き、國力疲弊す、此時波斯新に東方に崛起し、勢力漸く盛なりしかは、遂に之か爲めに滅はさる、時に紀元前五百三十八年なり。

第六章　波斯

裏海の南、イランの高原に、アリアン派の二種族住せり。西にあるをメディア人(Medes)とし、東にあるを波斯人とす。メディアは、紀元前第八世紀の半より、アッシリアの爲めに征服せられたりしか、アッシリアの國威衰ふるに及ひて、國王シイアキザーレス(Cyaxares)は、バビロンと合從し、アッシリアを滅はして自立し、其ナグリス左岸の地を併呑し、更に四方を蠶食して、兵威殆とバビロンと頡頏したり。

此時に當り、波斯もまたメディアの一屬國たるに過きさりしか、紀元前五百五十九年、シルス(Cyrus)立ちて波斯に王となれり。シルスは、初めメディア王の爲めにペルシヤ地方を管轄せしか、その衰頽に乘して、紀元前五百五十年遂に之を滅はし、メディアを取り、またバビロンを滅ほし

て、其他を併呑し、其版圖、東はインダス河(Indus)より、西はヘレスポント(Hellespont)の海峽に至り、今や波斯の勢赫々として日に盛なり。

紀元前五百二十九年、シルス死し、其子カムビセス(Cambyses)父王の遺志を紹きて、埃及を討ち、メンフィスを陷れ、更にフェニシヤを征服して、全くアッシリアの舊版圖を併有するに至れり。是に於て更に進みて、エチピヤ(Ethiopia)を討たんとせしも、本國に内亂起りしを聞き、師を班すの途中、狂疾を發して自殺せり。時に紀元前五百二十二年なり。

カムビセスの遠征

初めカムビセスの位に即くや、弟あり、スメルディス(Tmerdis)といふ、封せられて國の一郡を領せしか、カムビセス忌みて之を殺せり。後、カムビセスの遠征して、埃及にあるや、其虚に乘して叛を謀るものあり、自らスメルディスと稱して、王位に登れり。是に至りて、王族ダリユース(Darius)軍を起して之れを討し、遂に推されて王位に登る。時に紀元前五百二十一年なり。王英略あり、既に位に即き、叛徒を戡定し、東印度を征し、又西シシア人(Scythians)(今の露西亞地方に居る)を征せんと欲し、遠くダニユーブ(Danube)河北に至りたり。當時其版圖の大、夐に故アッシリア帝國に凌駕せり。

ダリユース王は、此版圖を分ちて二十州とし、州に知事(Satrap)を置き、其上に監察使を置きて、之を管治せり。宗教に關しては、其信仰を自由にし、必すしもペルシヤ固有の宗教たるゾロアスター教(Zoroaster 火を拜するの教にして、又バクトリア教(Bactrianといふ)を信するを強ひす。また國境には、城砦を築きて、蠻民の侵略を禦き、租稅の法を定め、貨幣を造る等、頗る内治に勵精せり。

時に多島海(Aegaean Sea)の諸嶋嶼、并に地中海東岸の地は、希臘のアイオニア人種(Ionians)の殖民する所なりしか、バビロン滅ひて波斯興るに及ひ、リディア、埃及相踵きて降り、小亞細亞の希臘人も、亦其壓服する所となれり。然るに、紀元前五百年、ミレトス(Milletus)のアリスタゴラス(Aristagoras)、國人を煽動し、本國の應援を得て、波斯の羈絆を脱せんことを謀りしかは、ダリユース王、兵を發して之を討ち、六年にして之を

平け、其翌紀元前四百九十三年、王は更に希臘本國を伐たんと欲し、大軍を發して、希臘に入ること再度に及ひしも、志を得す。更に再擧を謀らんとして、會、埃及に叛亂起りしかは、果さす。紀元前四百八十五年、王沒し、其子クセルクセス(Xerxes)父の志を紹きて、兵を希臘に出せしか、大にその敗る所となれり。これより波斯の國運衰頽して、復た振はす、希臘の勢力漸く盛なり。

第二篇　上古史

希臘史

總說

希臘の形勢

希臘は、歐羅巴文明の搖籃(クレード)とも稱すへき國にて、埃及の學藝も、アッシリアの技術も、又フェニシアの文字も、遠くは波斯及ひ印度の思想も、皆齊しく希臘の文華中に同化せられ、而して其涵養育成する所となりて、今日歐洲文明の濫觴を爲せるものなり。故に西洋史を研究するに當りて、希臘史は、最も重要に且つ趣味多きものなりとす。

希臘は、歐羅巴南東の半島にして、地中海中に斗出し、其沿岸出入多く、港灣に富めるか故に、他邦との交通早く開けて、夙に埃及、フェニシアの感化を被り、また小亞細亞に於けるアイオニヤ人は、東洋の文化を本國に傳へたれは、文華の發達最も早くして、國の內地は、アルプスの支脈縱橫に走りて、自然の障壁をなし、從ひて小邦割據して、互に拮抗せ

希臘の三大部

人種

しか故に、獨立自由の氣風と共に大に文物の進歩をなせり。

今地形に從ひ、國中を北、中、南の三大部に分つ。北部希臘は、テッサリー(Thessaly)とエピルス(Epirus)の二州にして、中部希臘は、九州より成り、アッチカ(Attica)最も重要なり。即ちアゼンス府(Athens)のある所たり。南部希臘は、一にペロポンチサス(Peloponnesus)といひ、七州より成り、ラコニア(Laconia)最も著はる。即ちスパルタ府(Sparta)のある所たり。

此國の人種は、初めペラスジ(Pelasgi)と稱するアリアン族の一支派、小亞細亞地方より移り來れるものゝ如し。後同しくアリアン族のヘレチス(Hellenes)なる民族あり。又小亞細亞地方より遷移し來り、ペラスジを逐ひ、遂に希臘全國に據りたるものなり。(希臘をヘラスHellasといふは、此ヘレチス人の名けたる稱にして、希臘とは、羅馬人の呼べる名なり。)其族中に三派あり、ドリアン(Dorian)、アイオニアン(Ionian)、アケーアン(Achaean)是なり、就中ドリアン、アイオニアンの二種族は、希臘史上甚た重要なるものにして、ドリアンは、南方を占めてスパルタ人之を代表し、性勇悍武を好み、アイオニアンは、中土を占めてアゼンス人之を代表し、最も文物に長せり。

第一章　波斯入寇以前希臘の狀態

(一)　上代

希臘上代の傳說は、神祇と英雄との動作にして、これに據れは、ヘラクレス(Heracles)、テセウス(Theseus)の二勇士、始めて希臘文明の基を開けるものの如し。この時代を勇士時代(Heroic Age)と云ひ、又詩聖ホーメル(Homer)の詩史に、當時の狀態を描寫せるを以て、一にこれをホーメル時代(Homeric Period)とも稱す。

ホーメル時代

ホーメルは、其生存の年代を詳にせすと雖も、其詩史イリアッド(Illiad)オディッセー(Odessey)の二篇は、實に希臘文學の起源にして、又古今詩學の基礎となす。今此二詩篇によりて、當時の狀態を稽ふるに、當時既に幾多の小邦分裂し、皆上に世襲の王を戴き、王者は、政教の權を併有し、又有事の日に當りては、元帥を兼ね、其下に元老の諮問官あり。又公民

の集會あり。貴族は未だ特別の階級を成すに至らず。長者勇士は一般に尊敬せられ、一夫多妻風をなし、奴隷公行せられて、戰時に得たる捕虜は、皆これにあてらる。航海の術は、夙く發達したれとも、海賊の横行甚しきを以て、人民多くは海岸を離れたる山村に僻在せり。又能く宗教を信し、祭祀を怠らず。神祇は、山海林泉の間に住し、人間と言語を交ふるものとせられたり。その重なるもの、十二神ありて、オリムプス(Olympus)山に臨御す。之をオリムプスの神と云ふ。

上古の狀態、概ね此の如し。而してドリアン種族の遷移ありしより、希臘の形勢こゝに一變せり。

人種の分配

(二) 人種の遷移

ホーメルの詩篇中には、ドリア種の事蹟を說けるものなく、アケイア人(Achaeans)を以て希臘の最大なる種族となし、希臘人の全體を指して、全アケイアンス(Pan-achaeans)と呼へり。故にドリア人の遷移は、ホーメルか詩篇を作りし以後の事たるや疑なし。今ドリア人の遷移以前に遡りて、希臘諸人種の分配を考ふるに、北部には、ペラスギ及ひヘレチスの二族あり。中央部の大半及ひペロポンチサスの西部には、エオリヤ人(Aeolians)あり。其北部及ひ中央部中のアッチカには、アイオニア人あり。而してその東南岸は、アケイア人の據有する所たりしに似たり。

ドリア種族は、もとテッサリ(Thessaly)の北部に居住せしか、紀元前一千百年頃、エピルス(Epirus)より南下して、テッサリーに移轉し來れる人種の爲めに逐はれて、其一部東西ロクリス(Locris)州の間に位する、一小地ドリス(Doris)に住せしか、人口繁殖するに從ひて、遂に其部分は、更に南進して、コリンス灣(Corinthian Gulf)を過き、ペロポンチサスの南部及ひ東部を征服して、こゝに據りしかは、從來の住民たるアケイア人、エオリア人は、その北隅に遁れて、此處に住するアイオニア人を逐ひて、今のアケイアの地を占め、アイオニア人は去りて中土のアッチカ及ひ多嶋海(Aegaean Sea)の諸嶋に移轉せり。

殖民

かくドリア人の遷移は、人口の超過を致し、これに由りて國外に移住するもの多きを加へ、東は小亞細亞、スレース(Thrace)の沿岸及ひ多嶋海の諸嶋嶼より、西は地中海の沿岸に至るまて、希臘人の足跡至らさる所なく、其最も遠きは、東は黑海の沿岸に至り、西はマッシリア(Massilia 今の佛蘭西のマルセイユ Marseilles)に及へり。特に小亞細亞の殖民地は、氣候温和にして、土地肥沃、且つ東洋諸國と相接するを以て、其文化を本國に傳ふるの媒介をなせり。

(三) 國祭及ひ二強府民の風尚

希臘の內地及ひ諸殖民地には、別に政治上の統一なかりしと雖も、宗教、言語、國祭等の同一なるありて、國民を結合せり。希臘人は、皆デルフイ(Delphi)の神託を奉ずること甚た篤く、苟も困難なる事件に會へは必ず此處に到りて、其神託を乞ふを常とせり。又宗教上の團體あり、これをアムフクショニー(Amphictyonies)と稱す。チリムピア(Olympia)の大競技は、ゼウス(Jews)神に奉納する爲め、五年毎に擧行せらるる國中の祭儀にて、四方より人民群聚して、種々の競技を演し、其優勝者には、褒賞として、橄欖樹の枝を以て作りし冠を與へたり、是れ當時希臘人の無上の名譽となせし所なり。

チリムピアの大競技

ゼウス神の祭

希臘の內地は、前に述へしか如く、許多の小邦分立し、就中アゼンスとスパルタとの二府は、最も强大にして、互に對峙して覇を爭ひたり。元來此二府は、其種族を異にし、從て其氣風を同しくせす。スパルタ人は、勇敢强硬にして武を尙ひ、貴族制の政體を以て國を始め、アゼンスは、文雅優美にして共和政をとり、美術商業を奬勵せり。二者の相違此の如くなるを以て、到底相容るゝ能はさるは、固より當然のことにして、其盛衰興敗は、實に希臘史の一大要部を占むるものとす。

(四) スパルタの勃興

初めドリア人の、ペロポンチサスに侵入するや、アルゴス(Argos)メッセニア(Messenia)、ラコニア(Laconia)の三國を建てしか、前二國に於ては、いつれも土人を雜へたるも、抵抗を試みるものなかりき。獨りラコニア

ライクルグスの訓練

に於ては、土人の抵抗を試みたるものは、之を奴隷となし、服從せるものには、兵に從ひ稅を納るゝの義務を負はしむる外、他の諸自由を許せり。而して獨りドリア人なるスパルタの市民は、一切の自由を有し、唯有事の日、戰に從ふの義務ありしのみ。此スパルタ市民は、僅に全市民の三十分の一に過きざるを以て、多數のアケイア人を壓服せんには、勢貴族的の制度を採り、勇武の民を作らざるを得ず。これ國家的訓練を以て、市民を薫陶するの已むを得ざるに至れるなり。

紀元前八百八十四年の頃、ライクルグス(Lycurgus)出てゝ、意を茲に注き、法制を定めて、專ら尙武的訓練に力を盡したり。尙武的訓練には、身體の剛健を要するが故に、婚姻に干涉して政府之を監督し、生兒も亦政府之が檢査を爲し、其羸弱なるものは之を山間に棄て、强剛なるもののみを哺育せしめたり。男子七歲に至れは父母の膝下を去り、二十歲に至るまて、政府の監督の下に體育の訓練を習ひ、成丁以上に至るも、猶營舍に起臥し、公共の食堂に飲食せしむ。要するに、ライクルグス立法の意は、スパルタの民をして、一箇の私を犧牲にして、公事に殉へしめんとするに在り。

此法制苛刻にして、偏する所ありと雖も、爲めにスパルタの市民は勇悍にして愛國の心に富み、七百年代に至りては、メッセニアを從へ、五百年代に至りては、アルゴスをも服して、全くペロポンネサスを一統したりしかは、進みて全希臘の盟主たらんとて、兵を境外に出たしゝより、遂に時を同しうして隆盛に至れるアゼンス人と衝突するに至れり。

アゼンスの政體

(五) アゼンスの勃興

南方に於てスパルタの勃興する時に當り、中土に於てはアゼンス盛運に嚮へり。アゼンスは、もと王政なりしか、ドリア人侵略の時、其王の戰沒せしより復た王を戴かす、アルコン(Archon)なる統領を置きて、其國を管治せり。アルコンは、其初め王族より一人を選ひ、終身在職せしめしか、後その期を十年と改め、終に一年に減し、人員は之を增して九

名とし、貴族の全體より選擧することとなりしかは、遂に純然たる貴族政となれり。然るに、貴族は子孫の計をなすに汲々として、毫も平民の利害を顧みさるのみならす、平民には更に參政の權を與へす、且つ成文律の存せさるより、貴族の施政者は、權を擅にするを以て、人民の不平漸く積み、紀元前六百二十四年ドラコ(Draco)出てゝ、律を制し法を定めしと雖も、甚た峻酷に失して、罪の輕重を論せす、悉く之を極刑に處せしより、怨嗟の聲益天下に滿つるに至れり。此時に當り、若しソロン(Solon)の出つるなかりせは、禍亂未た知る可からさりしなり。

ドラコの律

この時に當り、他の希臘諸州に於ても、また此アゼンスの如く、執權者と平民との間の睽離、到る處にありて、英邁の士此間に立ちて、人心を收攬し、政權を握るに至れる者少なからす、之を僭主(Tyrants)といふ。コリンスのペリアンデル(Periander)、サモス(Samos)のポリクラテス(Polycrates)等は、其著名なるものなり。當時人傑の輩出すること、猶支那の春秋戰國の時代の如く、希臘の七賢人と稱せらるゝものも、此間に出てたり。

人傑輩出

アゼンスに於ても、また當時の風潮を免れす。紀元前六百二十年、此國の貴族なるメガラ(Megara)の僭主テアゲネス(Theagenes)の義子に當る、キロン(Kylon)なるもの、アゼンスの政權を奪ひて、其僭主たらんとせしも、アラメオニーデ族(Alamaeonedae)なるアケイア種の貴族等、起て之ヲ逐へり。爾來內訌熄ます、國力爲めに疲弊し、アゼンス灣內のサラミス(Salamis)嶋は、メガラの奪ふ所となりて、久しく之を回復する能はす。ソロン(Solon)出でゝ、再ひ之をアゼンスの手に奪ひたるにより、ソロンの名聲頓に揚かり、遂に選はれてアルコンとなれり。

ソロンの政治

ソロンは、希臘七賢人の一と稱せらる。その位に登るや、先つドラコの法典を全廢し、新に貨幣を鑄造し、以て從來怨嗟の根源たりし、平民の貴族に對する負債償却に便したり。ソロンは、又國憲を改め、從來門地によりて階級を分ちしを、貧富によりて四等となし、地租の多少によりて權利と義務とを配當せり。第四等は、全く納稅の義務なく、從て權利を有すること少なく、またアルコンとなるは、第一等の階級に限ら

ピシストラトスの僭主

れたり。また元老院(Areopagus)、高等議會(Boule)、普通議會(Ecclesia)の三議會を置き、元老院の議員たるものは、嘗てアルコンの職に在りし者にして、高等議會の議員は、一等より三等に至る階級のものこれに選ばるゝを得、普通議會は、市民の何人を問はず、參列して發言するを得る所にして、こゝにアルコンを選擧することゝせり。

此制度の精神は、貴族と平民との間を調和して、時弊を拯ふにありたりと雖も、猶最上級を占むるものは、常に貴族にして、商人の徒は、富めりと雖も、土地を所有するに過きさりき。されは、ソロンの晩年に及ひ、禍機發して、アラメオニーデ家の徒、再ひアゼンスに興りて、沿岸地方の不平なる富商を煽動し、貴族に抵抗せしか、ピシストラトス(Pisistratus)亦北方山地の農民の領袖として起り、普通議會の多數を占めて、勢力侮る可からさるものあるより、貴族は、アラメオニーデと結託して、ピシストラトスを追放すること再度に及びしも、ピシストラトス、兵を率ゐて、アッチカ(Attica)に攻入り、終に勝を得て僭主となり、紀元前五百三十七年より同二十七年に至るまて、アゼンスを治め、猶ソロンの法典を襲用せり。

クリスセネスの制

時に東方に於ける波斯の勢力、日を逐うて熾に、リディア、バビロン等相繼て滅ぼされ、小亞細亞に於ける希臘殖民地も、悉く之に臣從するに至り、希臘も亦其形勢漸く危からんとす。是に於てピシストラトスは、大に水軍を修め、また從來は唯歌人の口傳に過きさりしホーメルの詩篇を版行して、大に希臘國民の敵愾心を奮起せんことを務めたり。蓋しピシストラトスの政略とする所は、全希臘の興隆を謀るにありしも、又これと共に、アゼンスをして嶄然として列邦の覇權を握らしめんとするにあり。ピシストラトス死して、その子ヒッピアス(Hippias)繼きしも、後年虐政を施しゝかは、曩に追放せられたるアラメオニーデ家の一門、之に乘じ、スパルタ人の援を籍りて、アゼンスを攻め、ヒッピアス敗れて身を以て逃れ、波斯に投せり。時に紀元前五百十年なり。

ヒッピアス既に逃れて、アラメオニーデ家の一門入り、その宗主クリ

スセチス(Clisthenes)、貴族平民間の軋轢を調和し、再ひ僭主の出つることなからんか爲めに、ソロンの法典を改革し、先つアルコンの權力を制限し、更に國中を十族に分ち、一族より五十の代議員を出たし、各族相代りて議長となるの制を定めたり。

かくて、アゼンスは、純然たる民主政となり、其自由平等の制は、よくアゼンス人民の愛國の精神を皷舞して、アゼンスをして中土に雄視するに至らしめたり。然れとも、其オストラシズム(Ostracism)なる秘密投票の法は、其立法の意、僭主の出つるを防くか爲めに、奸人を指摘するにありしも、其弊や、正奸を雑糅し、流毒を後世に遺すものありき。

此時に當り、波斯にはダリュース帝位にあり、勢隆盛を極め、封疆漸く希臘と相近接するに至り、小亞細亞に於ける希臘の殖民地も、皆其有となりしか、紀元前五百年頃、小亞細亞に於けるアイオニア殖民地の一なるミレトス(Milletus)、反を謀りしに、アゼンス人は、其同胞を援はんとして兵を出たし、當時波斯領なるリディアの首府サルディス(Sardis)を襲うて、之を焚けり。これを希臘及ひ波斯二國戰爭の起原とす。

歐亞衝突の源

此二國の戰や、實に東西兩洋の相衝突せる始めにして、希臘は、歐羅巴を代表し、波斯は、亞細亞を代表すといひて可なるか如し。而してこれ實に、希臘か其運命を賭せるものにして、從來内に相鬩ける希臘列邦は、これによりて全希臘の爲めにするの義心を奮起し、私怨をすてゝ連衡し、且つ此戰以後、從來西亞の地に集中せられし權勢は、移りて東歐の地に來り、希臘は世界に雄視するに至れり。

第二章　波斯戰爭以來希臘の狀態

(一)　波斯戰爭

波斯王ダリュースは、アゼンス人の遙に叛民を庇援するをきゝて、大に怒り、天に誓ひて、アゼンスに復仇し、且つ前僭主ヒッピアスを復位せしめんとし、紀元前四百九十二年、其女婿マルドニュス(Mardonius)をして、大軍を率ゐて往き征せしめしも、途颶風に遇ひ、船艦破壞して、空しく歸りしかは、王忿々の情に禁へす、更に第二次の軍を出さんとして、先つ

使節を希臘諸邦に遣りて、招降せしに、諸邦戰慴して之に應せしも、アゼンス及ひスパルタは、其使を斬りて拒絶の意を示しゝかは、波斯王は再ひ大軍を起し、ヒッピアスを嚮導として、多嶋海を超え、アッチカに上陸す。アゼンスの將ミルチアデス(Miltiades)、これをマラソン(Marathon)の野に迎擊して、大に之を敗り、波斯の軍遁れ走る。時に紀元前四百九十年なり。

マラソンの戰

此一戰に勝利を得しより、希臘列國の意を強くし、また波斯を畏れさるに至り、アゼンスの國威は、爲めに頓に揚かりて、殆とスパルタを凌駕せんとするの勢を見はせり。

波斯王は、この敗報に接し、益憤激し、全力を注きて親ら希臘を征せんとしたりしも、果さすして殂し、其子クセルキセス(Xerxes)王位に登り(紀元前四八五年)、父王の志を繼き、大軍を發して、親ら希臘に向ふ。此時に至りても、希臘諸邦同盟せす、テッサリー、アルゴス、セベス等の諸州は、波斯に與し、波斯に敵するものは、唯スパルタとアゼンスとあるのみ。

クセルキセスの敗績

スパルタは陸軍を以てし、アゼンスは水軍を以てして、波斯軍と戰ふ。紀元前四百八十年七月、スパルタ王レオニダス(Leonidas)、兵三百を率ゐて、セルモピレ(Thermopylae)の要路に據り、敵軍の南下を扼せんとせしか、戰利あらすして、悉く戰沒せしかは、アゼンスの軍亦支ふる能はす。波斯の兵は勝に乘し、長驅して、アゼンスに向ひしかは、その民心恟々、本國をすてゝ外に走らんとせしも、セミストクレス(Themistocles)なるものゝ勸めに從ひて、老少婦女及ひ家財は之を海島に移し、壯者は悉くサラミス灣中の戰艦に入れり。セミストクレスは、薄暮風波の荒るゝに乘ずて、波斯の水軍を襲ひて、大に之を敗る。波斯王は逃れて本國に歸り、マルドニウスも殘兵を率ゐてアゼンスを去り、ベオシア(Boeotia)にあり。時に希臘の諸邦、兵を送りてアゼンスに應ずるもの多く、プラテア(Plataeae)の一戰、波斯の軍全く敗れ、マルドニウスも亦戰沒せり。(紀元前四七九年)此時小亞細亞の河岸ミカレ(Mycale)に於ても、亦アゼンスの水軍大捷を得て、波斯希臘の戰爭一旦こゝに局を結へり。

波斯の水軍大敗

かく波斯軍を鏖殺して、希臘の平和を保つことを得しは、重にアゼンスの力なれば、アゼンスの勢威赫々として盛んに、紀元前四百七十四年、ペロポンヂサスの希臘諸邦は、波斯をして再ひ顫覦せしめさらんか爲めに、同盟を組織し、アゼンスを盟主として、聯邦の牛耳を執らしむ、之をデロス(Delos)同盟といふ。デロスは、多島海中の小嶋の名にして、此島のアッポロ(Apollo)の神殿に、各國財を醵して備へ置きしか故に此名あるなり。

デロス同盟

アゼンス人の勢已に此の如くなれは、セミストクレスは、市府を改築して、壯麗目を駭かし、且つ長城を築きて港市を保護せり。已にしてセミストクレスは、僭主たらんとするの嫌疑を以て、放逐せられ、アリスナデス(Aristides)代りて立ち、(紀元前四七四年)同盟の盟主として、爾來屢波斯軍を破り、紀元前四百六十六年に至りては、波斯人を全く歐洲より驅逐し、紀元前四百四十九年、更に二國の境界を分ち、是より大局の形勢一變して、兩國の交渉殆と絶え、アゼンスはペリクレス(Pericles)に至りて極盛に達す。

(二) アゼンス極盛時代及ひスパルタとの軋轢

曩に波斯との事あるや、スパルタは、平民及ひメッセニア人の力を得しこと頗る大なりしかは、彼等は、其功を恃みて、自由を得んことを望みしも、スパルタは之を拒絶せしかは、彼等終に謀叛し、十年の久しきに渉りて、之を平ぐること能はす。是に於て、スパルタ遂に援をアゼンスに請ふに至れり。

時にアゼンスに於ては、シモン(Cimon)政權を握りしか、唇齒の邦の衰亡に赴くは、自國に不利なるを以て、普通議會に勸めて、赴援せしめたるに、中道にしてスパルタ故なくその援兵を送還せしかは、アゼンスは、その亡狀を憤りて、遂にシモンを逐ひ、ペリクレスなるもの之に代りてその權を得たり。ペリクレスは、元來シモンの貴族黨なるに反して、共和黨なりしか故に、アゼンスは、遂にスパルタの平民に加擔するに至れり。

ペリクレスの憲法

是より先き、アゼンスは、アリスチデスの時、既にソロン以來繼續せる人民の階級を打破して、四民同權の制とせしが、ペリクレスに及ひて、更に憲法を改革して、制度を一層民主的にし、文學技藝を奬勵し、人才を導き、殿宇を建て、劇場を造り、文華粲爛として、一時の盛を極めたり。加之ならずペリクレスは、其經綸の才に加ふるに愛國の熱情を以てし、アゼンスをして啻に列國の盟主たるに止めず、更にアゼンスを戴ける、全希臘の一大帝國を建てんことを企圖し、兵を出して、頻に列邦の諸處を攻略せしかは、スパルタは、セベス(Thebes)と同盟して、之に當らんとし、禍機一發、終にペロポンヂサス戰爭の大禍亂を惹起せり。

(三) ペロポンヂサス戰爭

波斯との戰終りを告け、外敵既に退くや、忽ち内釁を生じ來れり。ペロポンヂサス戰爭是なり。此戰は、實にアゼンス同盟と、スパルタ同盟との軋轢に外ならず。即ちアイオニア種の人民と、ドリア諸州及ひエオリア種の人民との衝突にして、更に一方より見れは、民主制と貴族制との撞觸ともいふへきものとす。且つ此戰や、實に稀有の大戰にして、希臘全州皆戈を執りて立ち、加之ならずアイオニア人及ひドリア人の舊怨、これにより再ひ勃發せり。

此戰の遠因は、實にアゼンスの名聲日に隆盛に赴くを以て、スパルタの嫉を買ひたるに外ならず。然れとも、アゼンスか其威を挾みて、同盟諸邦に對し倨傲なりしは、アゼンスもまた罪なしとなさず。而して二者の間に於ける怨恨、積みて久しく發せさりしか、偶一の導火出來せり。即ちアゼンスか、コリンスと其殖民地との爭論に干渉して、コリンスを挫かんとせしより、コリンスは、急を告けて、援をスパルタに請ひしかは、是に於てスパルタは、ペロポンヂサスの諸州を同盟して宣戰し、紀元前四百三十一年、アゼンスに進擊し、到る處を蹂躙せしに、アゼンス亦水軍を以て、ペロポンヂサスの沿岸を抄掠せり。かく一は陸に、一は海に、互に勝敗ありしか、此間アゼンスに惡疫流行して、紀元前四百二十九年、ペリクレスも疫に罹りて死し、クレオン(Cleon)之に代り

兩國講和

アルシビデスの遠征

し、亦戰沒し、スパルタ王ブラシダス(Brasidas)も亦同時に戰沒せしかは、翌年に至りて二國遂に和議を講せり。

時にアゼンスにアルシビアデス(Alcibiades)といふもの出つ。ペリクレスの姪にして、有名なる當時の哲學者ソクラテスの弟子たり。欝勃たる野心禁すること能はす、功名を一賭に博せんとし、自ら兵を率ゐてシシリー嶋のシラキュース(Syracuse)を襲ふ。シラキュースは、ドリア人の殖民地にして、これを占領すれは、大にスパルタの勢力を抑損するに足るものたり。而かも戰半ならすして、アルシビアデスは、舊惡を摘發せられて、本國に召還せられしか、途にして走りてスパルタに投入し、スパルタの爲めに畫策する所あり。アゼンスの遠征軍は、其主將を失ひ、爲めに大敗せり。

スパルタの國勢盛んになる

スパルタは、アルシビアデスの言にきゝ、援を波斯にもとめてアゼンスを襲はんとす。アゼンスは、其國帑を盡して、水軍を修め、之に備へしも、爲めに財用内に不足し、外には其同盟諸邦の、風を望みて欵をスパルタに通するものあるに至り、國勢危殆に迫りしかは、アゼンスは、其民主政を更めて貴族政とし、以てスパルタの歡心を得て、媾和を得んとするに至れり。然るに、アルシビアデス再ひアゼンスに歸來し、フェニシアと和して、スパルタの艦隊を破りしより、アゼンスの新政府忽ち仆れて、アルシビアデスは、水陸の軍を總督して、アゼンスの勢威やゝ同復の色あり。然るに、スパルタの海將リサンデル(Lysander)善く戰ひ、ヘレスポントのエゴスポタミ(Aegospotami)の一戰に、全くアゼンスの艦隊を鑒にし、直ちに軍を驅りてアッチカに上陸し、アゼンスを圍めり。(紀元前四〇五年)、アゼンス市民策盡きて、遂に和を請ひしに、スパルタは、その長城を壞ち、船艦を奪ひ、又デロス同盟を解きて、ペロポンチサスの同盟に加はることを約して、之を允し、且つ其政體を變して、再ひ貴族政とし、三十の評議員を設けて、萬機を專制するを得ることゝし、スパルタの兵は、牙城に入りて、之を保護せり。此評議員を稱してアゼンスの三十暴主(Thirty tyrants)といふ。

スパルタの兵アゼンスを圍む

アゼンスの三十暴主

此三十暴主は、久しからずして顚覆せられしも、爾來アゼンスは、衰微して舊時の盛觀また見る可からず。之に反してスパルタは、益勢力を增し、全希臘の上に雄視せり。

スパルタの覇業

（四）スパルタの覇業

ペロポンネサスの戰捷以來、スパルタ、覇權を握りて一時の盛を極めしも、暴力を以て、列邦の上に臨みしか故に、列邦の之に不滿なるのみならず、內戰捷の餘澤として國力の富むに隨ひ、驕奢及ひ他の諸惡德之に伴ひ、盈滿の極、漸く將に其缺損を見んとす。

アゲシラウス王(Agesilaus)の時に及ひて、希臘の國威を四境に發揚せんと欲し、當時波斯領たる小亞細亞を伐てり。時に波斯に於ては、ダリュウス第二世歿し、アルタクセルキセス二世(Artaxerxes II)繼きて位に登りしか、王は利をセペス及ひコリンス等の希臘列邦に啗はして、スパルタと戰はしむ。蓋し當時希臘全國を擧けて、士風壞亂し、元氣消耗したれは、此等の諸邦か同胞を賣らんとせしも、もとより怪むに足らさるなり。

アゲシラウスは變を聞きて小亞細亞より歸り、之と戰ひて互に勝敗ありしか、紀元前三百八十七年、終に和を講し、希臘は、小亞細亞の西岸を全く波斯に讓與し、これに代ふるに、希臘列邦は、全く獨立して、波斯の干涉を離るへきことを約せり。これをアンタルシダス(Antalcidas)の條約といふ。スパルタは、此條約により、平和の擔保者たるの地位に立ちたるより、諸聯邦の同盟を破り、威を其間に振はんと欲し、セペスに對して戰端を開くに至れり。

アンタルシダスの條約

セペスの二名士

（五）セペスの覇業

セペスは、ベオチアの一市にして、民主政をとり、ベオチア同盟の覇權を握れり。スパルタの威力を擅にするに及ひて、之に反抗せしかは、スパルタの軍、進みてセペスを陷れ(紀元前三八三年)、民主黨を殺戮追放し、貴族黨をたすけて政權を壟斷せしめしに、民主黨の名士エパミノンダス(Epaminondas)ペロピダス(Pelopidas)の二人、力を協せて貴族黨を

仆し、スパルタ人を逐ひ、スパルタの軍とリュークトラ(Leuctra)に戰ひて、大に之を敗れり。是よりスパルタの威勢地に落ち、セベス之に代りて覇業を成せり。エパミノンダスは、更にヘレン同盟を組織し、希臘全邦を聯合して、以て、全希臘の國威を輝かさんとせり。然るに、アゼンスは、セベスの功名を妬みて、スパルタを助けてセベスを挫かんとし、百方之を妨碍せしも、セベスの勢大河の決するが如く、進みてペロポンネサスに入り、メッセナをしてスパルタの羈絆を脱せしめて、遂にスパルタを圍み、アルカディア(Arcadia)のマンチニア(Mantinea)の一戰、セベス大捷を得しも、不幸エパミノンダスは、この役に戰沒せり。(紀元前三六二年)是より先きペロピダスも既に死し、名士つきて、セベスの覇業もまた地に墜つ。翌年スパルタ王アゲシラウスも亦殂せしかは、これより希臘列邦は盟主たるものなく、互に覇を爭うて擾亂熄むことなし。かく希臘は、其國勢落日の如くなるにも似ず、文學、美術等は、此間に在りて、頗る絶妙の域に達したり。

(六) 希臘文藝の最盛期

西歐今日の文物技藝は、其源を希臘に發せるもの頗る多しとす。蓋し古代の文明に於て、埃及、バビロン、フェニシア等の文學は、今日に於ては其全きものを見る可からず。猶太の聖經、波斯のゼンドアベスタ(Zend-avesta)、印度の韋陀(Veda)等、唯今日に於て此等諸國當時の文華を僅に想像し得へきのみ。典籍やゝ具備し、文華の爛然として餘光を後世に及ぼすもの、東に支那あり、西に希臘あり。而して希臘文物の最盛期か、紀元前五百五十年より三百五十年代に至るの間に於て、恰も支那文物の勃興期たる周代の春秋戰國時代と、其時を同うしたるも、亦奇といふへし。

文物發達の因

然して希臘文物のかく發達進歩したるは、其上流人民の習慣として、親ら日常の雜務に關與することを爲さず、全くこれを奴隷に一任したるにより、自然學問技藝を修錬するの餘閑を有せしと、オリムピアの大競技の時、諸國より群集せる詩家文人等、交る〳〵其述作を公衆

の前に朗讀し以て、希臘人の最も名譽とせし橄欖樹の冠を得んか爲めに、平素畢生の心力を盡して、文學の研磨に從事せしと、外國との交通早く開けたるとに歸因するものとす。されは、哲學の先つ開けたる地の如きも、小亞細亞及ひ伊太利等の殖民地にして、外國と最も相觸接したる所にあり。先つアイオニア殖民地ミレトス(Miletus)のターレス(Thales)ありて、アイオニア派哲學の始祖となり、ピサゴラス(Pythagoras)は南伊太利に、ゼノフォン(Xenophon)は小亞細亞地方に生れて、其子エリア派哲學の始祖たり。エムペドクレス(Empedocles)はシシリー(Sicily)に生れ、アナキザゴラス(Anaxagoras)は小亞細亞に生る。之を要するに、哲學史上、ソクラテス(Socrates)以前の哲學と稱するものは、いつれも小亞細亞、伊太利等の地にあらさるなきこと此の如し。漸く降りて僭主時代に至りて、文物技藝等の最も盛なりしは、アゼンスにして、アゼンスは、國力昌盛且つ民制を用ひ、辯論の自由ありしか爲め、ペリクレスの時の如き賢哲輩出して、其下に集まり、一時の盛を極めき。ペロポンチ

ソクラテス

プラトー

サス戰爭の間に於て、アゼンスの道德壞敗し、詭辯派(Sophist)の徒横行するや、ソクラテス(紀元前四六九ー三九九年)出でゝ、道義を說きて、以て人心を救濟せんとせしも、遂に他の怨恨をうけて毒殺せられたり。其弟子プラトー(Plato紀元前四二九ー三四八年)アカデミー學派(Academic School)を開き、高尙幽玄なる哲理を說けり。次にアリストートル(Aristotle 紀元前三八四ー三二二年)出て、該博の識を以て、今日諸科學の基礎をなせり。今當時の哲學を考ふるに、ソクラテス以前は專ら目を宇宙の構造に注きしか、其以後に至りては、更に一歩を進めて、人生の道義問題に移れるものなり。

三劇曲家

詩に於ては、紀元前第五世紀(四百年代)に、エスキロス(Aeschylos)、ソフォクレス(Sophocles)、ユーリピデス(Euripides)の三劇曲家ありて、アゼンスに出つ。蓋し希臘の詩學は、ホーメル、ヘシオッド以來二百餘年間、殆と沈睡の有樣なりしか、紀元前七世紀の頃、僭主時代に至りて詩風一變し、從來の如く、神祇、勇士等の事業を讃頌する史詩、其勢を失ひ、琴歌(Lyric)

エソップ

史家輩出

美術の發達

と稱するもの起れり。是れ琴に和して情緒の感興を叙するものにて、其名家アナクレオン(Anacreon)の詩は、和樂輕快に、之に反してシモニデス(Simonides)、ピンダル(Pindar)の詩は、沈痛壯烈を以て稱せらる。當時まて諷詩行はれ、これに伴ひてエソップ(Aesop)の如き寓言家も出てたり。希臘の詩體は、今や再變して劇曲に移り、高妙の頂に達すると共に散文もまた典雅の域に臻り、哲學者にはプラトーあり、史家にはヘロドトス(Herodotus)あり。ヘロドトスは、紀元前五世紀の初め、小亞細亞に生れ、史界の鼻祖と稱せらる。その後スシディデス(Thycydides)及ひゼノホンの兩史家、共にアゼンスに出てたり。

此間また最も美術の發達を促し、建築、彫刻、繪畫等頗る進歩せり。蓋し希臘の地たる、風光明媚なるか故に、美術思想の發達著るく、加ふるに木石の良材に富み、且つ當時各州相競ひて都府の盛觀を衒ひしより、良匠相踵きて輩出せり。殊に當時の彫刻は、古今獨歩と稱せられ、ペリクレス時代に至りて、最も其絶妙に達す。アゼンスのパーセノン(Parthenon)の神堂の如き、壯麗目を駭かせり。彫刻家にはフィディアス(Phidias)最も著名なり。

ヒリップ二世の侵略

第三章　マセドン盟主時代

(一)　ヒリップ及ひアレキサンダー王

スパルタ、セベスの戰は、彼のペロポンネサス戰爭の時の如く、列國皆これに關係したれは、いつれも疲弊甚たしく、終に北方强國の爲めに一統せらるゝに至れり。

マセドニアは、北方險絶の地に位し、その風俗粗野なり。南方諸國隆盛の時に當りては、夷狄として蔑視せられしか、紀元前四百年頃より、文物を奬勵して、希臘列國の間に伍し、エパミノンダス戰沒せし後、一年にして、ヒリップ二世登祚し(紀元前三五九年)、武を練り兵を養ひて、漸く其四邊を威服し、アゼンスと同盟せるテッサリーの海岸を侵略せしかは、アゼンスは、波斯と合同して之を敗りしも、程なくヒリップは、中央希臘に其勢力を得るに至りしかは、アゼンスは、セベスと同盟して其南

アレキサンダー王ヘンなるトレスキー海峡を渡る

下を禦かんとせしに、ケロニア(Chaeroneaペオチアにあり)の一戰(紀元前三三八年)に大に敗られ、ヒリップ遂に其覇業を成して、盟主となり、更に外釁を開きて、内國の民心を一致せしめんとし、兵を波斯に出たさんとして、中道にして弑せらる。(紀元前三三六年)其子アレキサンダー(Alexander)繼きて踐祚し、父の遺志を紹きて波斯を征せんとせしか、列國其年少なるを侮り、叛を謀るものありしかは、先つ之を截定し、遂に三萬五千の大軍を提けて、ヘレスポントの海峽を渡り、東の方小亞細亞に侵入す。

時に波斯にはダリュウス三世位にあり。埃及屢叛亂して、國力疲弊し、境域徒に厖大にして、生氣の存するものなかりしも、一舉して之を征服せんとするは、亦甚た容易ならさりき。

アレキサンダー王は、小亞細亞に入りて、先つ波斯の軍をグラニクス(Granicus 黑海中のマルモラ海に注く)河畔に破り、而して後顧の憂を除かんか爲めに、地中海沿岸の波斯領なるフェニシア、猶太等を征服し、

アレキサンダー王の遠征

ゴーガメラの大戰

更に埃及に入りしに、其民簞食壺漿して之を迎へ、額手其波斯の羈絆を脱するを祝したり。(埃及のアレキサンドリア府Alexandriaは實に此時王の建つる所に係る)王は進みてシリアに入り、イッシュス(Issus)に於て波斯王の大軍を迎へ戰ふに會せしも、之を擊破したれは(紀元前三三三年)ダリュウス王は、僅に身を以て逃れ、ユーフラテス河以西の地を割きて、和を議せんとせり。然れとも、アレキサンダー王は天に二日なし地に二王ある可からすとして、之を聽さす、長驅して波斯の内地に侵入し、ナグリス河畔のゴーガメラ(Gaugamera)に於て、波斯の大軍を破り、(紀元前三〇一年)波斯王は、逃れんとして途に弑せられ、波斯は全くアレキサンダー王の版圖に入れり。蓋し王の初め波斯を征せしや、もと希臘昔日の仇を復せんとするにありしも、是に至りて更に希臘と波斯とを合して、一大帝國を建てんとの志を起し、務めて波斯の民心を懷け、自ら波斯の衣冠を着け、波斯王の女と婚したり。王は、更に其版圖を擴めんと欲し、ヒンヅークーシュ(Hindukush)山を超え、アフ

ガニスタン(Afghanistan)を經て印度に攻め入れり。

印度は、當時世界の極東と稱せられたる所にて、紀元前二千年頃、アリアン族の一種か、ヲクシュス(Oxus)河上流の邊より南下して、建國したるものなり。日種月種の二族相次て覇たりしか、後權力カマカダ國に移り、紀元前五百十八年、波斯王ダリュウスの侵寇を被り、インドス河沿岸の地を略奪せられたりしか、是に至りて又アレキサンダーの爲めに攻略せらる。

アレキサンダー王、インドス河畔の諸侯王を從へ、更に東せむとせしに、其師遠征に勞して、また進むことを欲せさりしかは、已むを得すして師を班せり。

アレキサンダー王は、居城を故都バビロンに奠め、其宏圖を成さんとを計りしも、雄志未た酬いす、後幾もなくして殂せり。時に紀元前三百二十三年なり。

かくアレキサンダー王は、中道にして殂せりと雖も、其東征によりて、

アレキサンダー師を班す

西方亞細亞の文明希臘に導かれ、歐洲今日の文明に資する所鮮少ならすとす。而して爾來九百年、アラビア勃興の時に至るまて、希臘の風尚また西方亞細亞を感化したれは、アレキサンダー王の遠征は、實に東西文華の交換を媒介せるものにして、東方歐羅巴と西方亞細亞との軋轢、これより久しく熄みたりき。

東西文華の交換

(二) アレキサンダー帝國の分裂

アレキサンダー王、既に沒して、嗣なく、麾下の軍將互に相爭ひて、帝國分裂し、爾來二十年間(紀元前三二三—三〇一年)は擾亂絶ゆることなく、此間に王の血統は、悉く殺され、終に紀元前三百一年に至り、アレキサンダー王の版圖たりしもの、分れてマセドニア、スラシア(Thracia)、シリア及ひ埃及の四部となる。就中埃及、シリアの二國を重要なりとす。

(1) 埃及

埃及は、アレキサンダー王の一將トレミー(Ptolemy)の領する所にして、爾來子孫相嗣きて、此に君臨すること二百餘年、トレミー三世(紀元前

トレミー朝

アレキサンドリアの隆盛

二四七年ー二二二年頃)の時に至りて、埃及最も隆盛を極め、首都アレキサンドリアは、世界商業の燒點となり、更に希臘風文明の中心となりて、また有名なる圖書館の設立あり。博言天文の學開け、數學の如きは、大に進歩し、人才輩出して、一時碩學の淵叢となれり。然れとも、これ唯埃及の外觀を飾りしに過きすして、人民の開明に毫も影響する所なかりき。

シリアの版圖

(2) シリア

シリアは、セリユークス(Seleucus)之を領し、漸次其版圖を擴め、ヘレスポント海峽を渡りて、ゲンヂス(Ganges)河に至り、北はジヤクサルテス(Jaxartes)河より、南は印度洋に至る宏大の版圖を領し、其勢甚た盛なりき。又これよりして希臘の技藝言語等、漸次に東漸して、一時小亞細亞、シリアは、文物及ひ商業の中心となれり。然れとも、後綱紀廢弛、子孫相嗣くこと二百餘年の間、戰亂相次き、小邦分裂し、小亞細亞にペルガムス(Pergamus)王國勃興し、ユーフラテス河の北東にガラチア人獨立して、國を建てしかは、國運これより衰頽せり。

獨太の獨立

パレスタインは、其初めは埃及のトレミー朝に隷屬せしも、後シリア王アンチオーカス(Antiochus)三世の時、シリアに從へり。その埃及に屬せし時に於ては、多くアレキサンドリアに移住して、其言語風習等希臘風と相混せり。ヘブリュー語の聖經の原書か、希臘語に譯せられしは、實にトレミー二世(紀元前二八三年ー二四七年)の時にして、此事は大に耶蘇教の傳播をたすけたり。後シリアに屬するに及ひ、其都府の三面皆異教者に圍まれたれとも、猶太人は一團となりて、其信仰を保持せんことを務めたりしかシリア王切に其信仰を破らんとして、酷虐を極めたりしを以て、紀元前百四十四年終に獨立せり。

(三) アレキサンダー王時代の文華

アレキサンダー王及ひその後嗣の間は、遠征と商業交通の自由とによりて、希臘の文藝大に四方に弘まれり。然れとも、唯外に散布するのみにて、其内容に至りては、觀るに足るもの少なし。當時韻文漸く衰へ

て、批評、推論等の散文行はれ、詩には唯セオクリトス(Theocritus)のイディルス(Idyls)の一篇見るに足るべきものあるのみ。而して哲學は、世の衰微と共に、道義の問題より人生の問題に遷り、高踏自ら潔くするの風行はれ、アリストートルの後、シニック(Cynic)、ストイック(Stoic)、エピキュリアン(Epicurian)等の諸派の傾向、何れも皆然らざるなし。就中ストイック派の學說は、羅馬に入りて大に行はれたり。

學說の遷移

第四章　希臘の衰微

アレキサンダー王死後、その版圖分裂の狀は、既に說けるか如し。而して翻りて希臘本國の狀態を察するに、ケロニア戰爭以來、マセドン覇主となり、アレキサンダー王歿して後も、猶餘威を全國に振へり。當時スパルタにては、王アギス(Agis)二世マセドニアと戰ひて、軍に歿し、アゼンスにては、貴族黨と民主黨との軋轢猶やまず、技術文學等は餘喘を存すれとも、愛國不覊の氣風漸く減し、奢靡風をなし、道德大に壞敗せり。

アケイア同盟衰ふ

紀元前二百年代の半に至りて、スパルタは、舊時の勢を恢復せんとせしも、マセドニアは、アケイア(Achaea)同盟の下に諸邦を聯合して、これに當り、遂に同盟の選主たる、マセドン王ヒロポーメン(Philopoemen)、スパルタを從へ、而してその死すると共にアケイア同盟も亦衰へて、終に羅馬をして全國を壓服せしむるに至れり。

世界權勢の中心、今や希臘を去りて、將に羅馬に遷らんとす。吾人は、羅馬帝國の盛時を說くに先つて、暫く其上代の事蹟を考へ、其勢力の由て來る所以を察せさる可らす。

西羅馬皇帝表

ナシヨヴィアヌス、オーガストス帝登祚ヨリ西羅馬滅ニ至ル迄五百七年間

一、	オーガストス	(Augustus)	紀元前 三一、——一四、
二、	ティベリュウス	(Tiberius)	紀元前 一四、——紀元三七、
三、	カリグラ	(Caligula)	紀元 三七、——四一、
四、	クラウディウス	(Claudius)	四一、——五四、
五、	ネロ	(Nero)	五四、——六八、
六、	ガルバ	(Galba)	六八、——六九、
七、	オソ	(Otho)	六九、
八、	ヴィテリウス	(Vitellius)	六九、
九、	ヴェスパシアヌス	(Vespasianus)	六九、——七九、
一〇、	ティトス	(Titus)	七九、——八一、
一一、	ドミシアヌス	(Domitianus)	八一、——九六、
一二、	ネルヴァ	(Nerva)	九六、——九八、
一三、	ツラヤン	(Trayan)	九八、——一一七、
一四、	ハドリアン	(Hadrian)	一一七、——一三八、

一五、アントニウス、ピウス (Antonius Pius) 一三八、——一六一、
一六、マークス、オーレリュウス (Marcus Aurelius) 一六一、——一八〇、
一七、コモドス (Commodus) 一八〇、——一九二、
一八、ペルティナックス (Pertinax) 一九三、
一九、ディディウス、ジュリアヌス (Didius Julianus) 一九三、——二一一、
二〇、セプティミウス、セヴェルス (Septimius Severus) 二一一、——二一七、
二一、カラカラ (Caracalla) 二一七、
二二、マクリヌス (Macrinus) 二一八、——二二二、
二三、エラガバルス (Elagabalus) 二二二、——二三五、
二四、セヴェルス、アレキサンダー (Severus Alexander) 二三五、——二三八、
二五、マキシミヌス、スラックス (Maximinus Thrax) 二三七、
二六、ゴルディアヌス 一世 (Gordianus I) 二三八、——二四四、
二七、同 二世 二四四、——二四九、
二八、ヒリップス、アラブス (Philipus Arabs) 二四九、——二五一、
二九、ダシュウス (Dacius) 二五一、——二五三、
三〇、ガルス (Gallus)

三一、エミリアヌス (Æmilianus) 二五三、
三二、ヴァレリアヌス (Valerianus) 二五三、——二六〇、
三三、ガリエヌス (Gallienus) 二六〇、——二六八、
三四、クラウディウス 二世 (Claudius II) 二六八、——二七〇、
三五、アウレリアヌス (Aurelianus) 二七〇、——二七五、
三六、タシトス (Tacitus) 二七五、
三七、プロブス (Probus) 二七六、——二八二、
三八、カルス (Carus) 二八二、——二八三、
三九、ニユメリアヌス (Numerianus) 二八四、
四〇、カリヌス (Carinus) 二八四、
四一、ディオクレシアヌス (Diocletianus) 二八四、——三〇五、
四二、コンスタンチン (Constantine) 三〇五、——三三七、
四三、コンスタンチヌス二世 (Constantinus II) 三三七、——三六一、
四四、ジュリアヌス (Julianus) 三六一、——三六三、
四五、ジョヴィアヌス (Jovianus) 三六三、——三六四、
四六、ヴァレンティニアヌス (Valentinianus) 三六四、——三七五、

四七、グラシアヌス (Gratianus) 三七五、——三八三、
四八、ヴアレンティニアン 二世 三八三、——三九二、
四九、セオドシュウス (Theodosius) 三九二、——三九五、
五〇、ホノリュウス (Honorius) 三九五、——四二三、
五一、ヴアレンティニアン 三世 四二五、——四五五、
五二、ペトロニュウス、マキシムス (Petronius Maximus) 四五五、
五三、アヴィトス (Avitus) 四五五、——四五六、
五四、マジョリアヌス (Majorianus) 四五七、——四六一、
五五、リビュウス、セヴェルス (Libius Severus) 四六一、——四六五、
五六、アンセミュウス (Anthemius) 四六七、——四七二、
五七、オリブリュウス (Olybrius) 四七二、
五八、グリセリュウス (Glycerius) 四七三、
五九、ジュリウス、ネポス (Julius Nepos) 四七三、——四七五、
六〇、ロームリュス、オーグスチュルス (Romulus Augustulus) 四七五、——四七六、

西羅馬皇帝表終

羅馬史

總說

歐洲文化の基

希臘漸く崛起して、アレキサンダー大王、力を東方に伸はし、續て埃及のトレミー朝起りて、燦然たる文華を輝かせし間に、無比の大帝國を建てゝ希臘の文藝を融化し、これを一新して、西歐諸州に注入すべき大使命を有せる一小都府の、伊太利ナベル(Tiber)河畔に於て、徐々に發達をなすあり。これを羅馬となす。

上代に於けるあらゆる國民の宗教、法律、風俗、言語、文字、技藝、科學等の遺片を打成して、一團となし、更に一種特有の文化を作爲して、之を後世に傳へたるものは、此羅馬にあらずや。近時に於ける歐洲國民の習慣、制度等は、實に羅馬當時の遺風に基けるもの多しとす。故に、羅馬は之を稱して、古代と今代との鴻溝に架せられたる橋梁なりといふも不可なきなり。

伊太利は、元來山嶽の起伏希臘の如く甚しからず。故に小邦分立して相嫉視するの弊なく、よく大國を建設するに適せり。從て國民の思想自ら國家的の觀念よりも、寧ろ宇宙主義に傾き、且つ希臘の地理の東方に便にして、東洋の文化を吸收するに適せしに反して、羅馬は西方に港灣多くして、西歐諸邦に文化を散するの地位に立てり。希臘國民の文藝に堪能なりしに比して、羅馬人は武事に長し、希臘の港灣多くして殖民的なりしに比して、羅馬は內治的なり。希臘には自由獨立の氣風盛に起り、羅馬は宗教一統の中心となれり。羅馬は、希臘の如く理想的ならずして、寧ろ實行的なり。羅馬は、又其氣風希臘の如く輕慓ならず、寧ろ嚴肅なりといふを得へし。

羅馬の氣風

伊太利は歐洲中央の一半嶋にして、三面地中海に臨み、アペンニン(Apennines)山脈縱に國內を貫通せり。國を三大部に分ち、ポー(Po)河以北半嶋部の外部にあるものを上伊太利といひ、半嶋部の北半を中部伊太利といひ、ナベル(Tiber)の流これを貫流し羅馬府此所にあり、而して半嶋の南部を下伊太利といふ。

然して上伊太利には、ケルト種のゴール(Gaul)人あり。中央には、外より移植せしエトルスカン(Etruscan)人、及ひ土着なるサベリ(Sabelli)人あり。ナベル河畔のラテン種は、諸種族の混合より成れるものなり。伊太利の河岸には、希臘の移住民多し、內部にはサベリ人の諸派あり、エトルスカン人は、上代に於ては、最も重要にして、ナユラニア(Turania)即ち蒙古族の一支族、北部より移住し來り、初め上伊太利を占め、後南下してナベル河畔に繁殖せるものゝ如し。上代に於て既に一種の宗教を有し、且つ繪畫、建築、彫刻の技にも通したり。サベリ人は、もと牧畜を業とし、其風至て質樸なりき。ラテン種は、三十都市に住し、上代に在りて既に同盟を作り、アルバロンガ(Alba Longa)を其盟主となしたり。

第一章　羅馬の勃興

上代の事は、多くは希臘の神代史に潤色附會せし荒唐の傳說たるに過ぎされは、茲に說くを須ゐす。唯紀元前七百五十三年、アルバロンガ

羅馬府の起源

の王かナベルの左岸パラナイン(Palatine)山に城壁を築きたるは、實に羅馬府の起源なりとす。既にしてサベリ侵入し、羅馬人同盟して、交互に王者を選ひて、之を推戴せるものゝ如し。後エトルスカン此都を征服し、其七谷を灌漑開拓し、其酋長遂に王となりて、之に君臨せしか、紀元前五百〇九年に至りて、革命起り、王政廢せられて、權勢貴族の手に移れり。

民會

都督

蓋し羅馬は、早くより人民に階級ありて、平民は之をプレベアン(Plebeian)といひ、大抵皆征服せられたる人民にして、一切參政の權を有せす。而して貴族は之をパトリシアン(Patrician)といひ、羅馬の舊族にして、政教の主宰たり。貴族の權、往々にして王者を凌駕せしか、エトルスカン王なるセルヴィユス、ツルリユス(Servius Tullius 紀元前五七八ー五三四年)の時、平民の權を伸暢し、すへて土地を所有するものは、兵役納稅の義務あるものとし、民會(Comitia Centuriata)を開きて、宣戰立法の權を與へ、又別に國家危急のときには、都督(Dictator)を置きて、兵馬の全權

貴族平民の軋轢

を專制せしむるの制を定めたり。

然るにタルクイニウス(Tarquinius 紀元前五三四ー五一〇年)嗣くに及ひて壓制を事とし、政權を擅にせしより、遂に逐はれて、執政代りて國事を專制せしか、此執政並に三百人の顧問官は、皆貴族のみ、これに任するを以て、紀元前四百九十四年に至りて、貴族と平民との間に軋轢起り、爾來二世紀(紀元前四九四年ー二九四年)の間爭亂相續けり。此軋轢は、紀元前二百九十四年より同百三十三年まて小康なりしも、間もなく爭端再ひ開けて、紀元前六十七年に及へり。

抑、平民の最も塗炭に苦みしは、屢他族との戰亂の爲め、常に軍に從はさる可からさること是なり。而して平民は自ら武具を調へさる可からさるより、貧困に陷り、而かも毫も報酬を得る能はす、且つ田地は兵馬に蹂躪せられて、荒蕪せさるを得す、又事なきの日と雖も、專ら力を耕作に用ふる能はすして、爲めに債を地主たる貴族に負はさるはなし。而して其息高く、償却の法また嚴酷なるにより、或は奴隸として債

護民官

平民議會

主に事ふるものあるに至れり。これによりて平民は、終に貴族の虐待に堪ふること能はず、紀元前四百九十三年、終に同盟して羅馬府を去り、府を距る四哩なる聖丘(Sacred Hill)に據りて、獨立を宣告せり。然るに當時羅馬は、外敵逼り來り、平民の力を要するが故に、貴族は大に讓歩して、其歸府をもとめたり。即ち平民の中より、五名の護民官(Tribunus plebis)を置き、以て貴族に對して平民の權利を確保せしむるを許せり。隨て平民の一議會起りて、其輿論を主張す。これを平民議會(Comitia Tributa)となす。これより平民の勢力、漸く貴族を凌駕せんとするの勢あり。

前に說けるが如く、戰爭起る毎に、主として干戈の勞を執るものは、爾來事有る毎に、權利を伸張し、終に貴族枉法の弊を拒かんとし、十人の委員(Decemviri)を選ひて、成文律を編し、十二の銅板に刻して、市廳に掲けたり。然るに、貴族は、其特權を侵害するものとなし、再ひ護民官なき政府を建てんとしたりしかは、平民は再ひ聖丘に去り。終に平民議會

民主政の建立

羅馬人とラテン人とイタリアの別

も、貴族議院と同等の權力を有し、且つ貴族と平民との結婚を許す等の讓歩を得て歸れり。(紀元前四四五年)紀元前三百九十年、ゴールの入寇ありて、羅馬府の焚燒せし後、平民は其時大功ありしより、其權力益、張り、更に執政の一人は、必す平民たるへきの制を定むるに至りて、平民は漸く參政の權利を得、終に紀元前二百八十四年に至りては、貴族平民漸く相一致し、これと共に政權全く平民に移り、純然たる民主政體となるに至れり。

羅馬は、此間に在りて、外屢、近隣の部落と戰ひ、困厄に陷ることありしも、既に純然たる民主政立ちてより、漸次其版圖を擴張せんとし、先つ中部伊太利の地を征して之を略し、北部も尋て之を平けたり。かく新版圖相次て其掌裡に歸せしより、今や羅馬は、其政略を一變せさるを得さるに至れり。乃ちナペル河畔の羅馬本領の自由市民を羅馬人(Populus Romanus)と號して、悉く一國の大權を握らしめ、更にその所屬地の民を分ちて、ラテン人、イタリア人の二となし、敢て其心身の自由

を褫奪することなかりしと雖も、後者は全く參政の權を得ず、前者は容易に羅馬市民と同等の權を得らるへきものたり。此政略たる、一方には所屬諸國に自治を許しなから、また之を羅馬人大權の下に結合するものにして、後羅馬か一大帝國を建つるを得たるも、全く此政略に出れるなり。

希臘羅馬の衝突

第二章　羅馬隆盛時代——外國征略

羅馬は、かく内に於て民主政成ると共に、外に在りては、殆と全伊太利を從へ、當時降らさるもの、唯南方なる希臘殖民地あるのみ。故に更に兵を希臘の殖民地に出すに及ひ、此に始めて羅馬と希臘との衝突を見るに至れり。

羅馬の兵を、希臘殖民地に出すや、當時其殖民地中にありて最も盛なるタレントム(Tarentum)は、援を希臘のエピルス王ピルス(Pyrrhus)に請へり。ピルス王、兵を出し、再度(紀元前二八〇年及び二七九年)羅馬を破りしか、ゴール人の希臘に侵入するを聞きて、兵を班し、マセドン王と共に之を擊退し、更に伊太利に攻入せるに、羅馬は、カーセーヂ(Carthage)と同盟して、之を破り、終にシシリー島は、カーセーヂの手に歸し、南伊太利は、羅馬の版圖に入れり。

然るに、羅馬は、今や其地位の安全の爲めに、シシリーを併有するの要あり。是に於てか勢カーセーヂと戰はさる可からす。

カーセーヂの勃興

(一)　ピューニック戰爭

カーセーヂは、もとフェニシアの殖民地にして、紀元前八百五十年の頃、フェニシア人の内亂を厭うて、北亞非利加に移住せるものなり。然るに、年と共に隆盛となり、紀元前六百年の頃、希臘の殖民を地中海の西方に擴めて、フェニシアと相敵するに當り、カーセーヂは、本國か執れる平和主義に反して、之に頡頏せり。既にして本國の、波斯の爲めに滅はさるゝや、逃れてこゝに移るもの多く、勢力益、强盛となり、北亞非利加の北岸及ひ地中海の諸島を領し、版圖漸く恢大し、終に希臘領のシラキュース(Syracuse)と戰端を開きて、頗る多事なるに乘して、紀元前二百六

第一次ピューニック戰爭

十四年、羅馬は、兵を出してカーセーヂを伐ち、爾來二百四十一年に至るまて激戰やまず、漸くにしてカーセーヂを破り、シシリーのカーセーヂ領を得て、之を其屬州(プロヒンス)(Province)とせり。これを第一次のピューニック(Punic 拉丁語にてフェニシアを指していふ)戰爭といひ、羅馬か所謂屬州なるものを得たる權輿なりとす。而して羅馬は、更にカーセーヂの餘弊に乘して、其所領たるコルシカ(Corsica)サルディニア(Sardinia)等の諸島を奪ひ、又北方ゴール人と戰ひて、版圖を北方に拓きたり。かくの如くにして、羅馬は今や全く伊太利を統一せり。

將軍ハミルカルバルカス

かく羅馬は、先つゴール人を逐ひ、希臘を破り、カーセーヂを伐ち、勢威赫々として、環視の諸邦、漸く目を側てゝ之に對せり。殊に、カーセーヂの如き、自國の屈辱を見て、憤懣の念絶えず、名將ハミルカル、バルカス(Hamilcar Barcas)、深く西班牙の內地に入り、之を占領し、兵を練り糧を積み、窃に異日羅馬に侵入するの根據とせしも、中道にして死し、義子ハスドルバル(Hasdrubal)遺志を繼き、北進して羅馬に入らんとせしか、紀元前二百廿一年、弑に遭ひ、ハミルカルの長子ハンニバル(Hannibal)嗣きて、又その兵を調し、エブロ(Ebro)河を渡りて、ピレニース(Pyrenese)山を超えてゴールの地方に入る。而して其本意は列國を連衡して、新興の羅馬を滅ぼさんとするにあり。されは、ゴール先つ欵を通し、カーセーヂの本國も之を援け、希臘また遙に之に應し、マセドン王ヒリップ三世の如き、大にこれに協力せり。ハンニバルは、眇然たる六尺の軀に、當時の輿望を負ひて、新興の國を制せんとす。六萬の大軍旌旗堂々として、アルプス(Alps)の險を踰え、直下して伊太利の平野に見はれ、北以太利を略し、向ふ所披靡せさるはなし。而してエトルリア(Etruria)に入り、トラスミメヌス(Thrasumenus)湖畔の大戰に、羅馬軍を鏖殺し、再ひアプリア(Apulia)のカンチ(Cannae)に於て、大に羅馬兵を破り、長驅して將に羅馬府城を襲はんとす。是に於てシラキュース、マセドニア及ひ伊太利の諸府、羅馬に向て宣戰し、羅馬の命脈旦夕に迫れり。幸にして羅馬のコルチリュース、シピオ(Cornelius Scipio)兄弟先つ西班牙に入りて、ハンニバルの兵を起す

第二次ピューニック戰爭

ンニバルの虚を擣き、更にカーセーヂに入りて大捷を得るあり。ハンニバル因て兵を班して、之とザマ(Zama)に戰ひ、大に敗れ、遂に其西班牙領を讓與し、歲弊を貢するを約して、羅馬と和を媾す。これを第二次ピューニック戰爭(紀元前二一八年—二〇一年)とす。

羅馬は、此戰爭によりて、既にカーセーヂを屈するを得しかは、更に眼を東方に向けて、希臘を覬覦せるに、恰もよし、マセドンのヒリップ三世、シリアのアンチオーカス三世と相約して、埃及王の幼弱なるに乘じて、之を割領せんとするより、埃及援を羅馬に請ひしかは、羅馬は、兵をバルカン(Balkan)半嶋に出して、希臘を伐ち、大にマセドンを懲らし、希臘諸州を其覊軛より解放せしめたり。

ハンニバル死す

時にハンニバル、カーセーヂより逃れてシリアにあり。シリア王に勸めて、直ちに伊太利を衝かしめんとせしも、王聽かすして、兵をバルカン半嶋に出だし、シピオの爲めに敗られ、羅馬の兵終に小亞細亞に入りて、シリアは壓服せられ、ハンニバルはビシニア(Bithynia)に走りしか、遂に毒を仰きて死せり。

マセドン國邦となる

今やカーセーヂ、シリア、マセドン等の諸國、皆衰替沈淪、昔日の狀に復るへくもあらす。唯マセドンにては、ヒリップ三世死し、其子嗣くに及ひ、羅馬に敵せんと謀りしかは、エミリュース、ポールス(Aemilius Paullus)伐ちて之を破り、遂に全く羅馬の屬邦となせり。(紀元前一六八)、希臘半嶋も、次て羅馬の版圖に入りて、(紀元前一四六年)昔日の榮華復た見る可からさるに至れり。

第三次ピューニック戰爭

カーセーヂも、また第三次のピューニック戰爭によりて全く滅ぼされ、羅馬の屬邦となり、今の地中海濱の地、悉く羅馬の版圖となり、其紀元前二百四十一年に於て、始めてシシリーに屬邦を得し以來、茲に百年に過ぎさるに、羅馬は今や殆と隆盛の極に達せり。

(二) 羅馬の風尚及ひ文華

かく羅馬の隆盛に達するとゝもに、風尚文華等にも一變動を來せり蓋し彼の勇敢剛毅なる往日の風、國の富榮に至ると共に、漸く消耗し

羅馬の奢靡

且つ希臘と相接觸するに及ひて、其文華輸入せられ、衣食住漸く奢靡の風に流れ、ポルシュース、カトー(Porcius Cato)の如きは、大に之を慨して、素樸の舊風に回さんとせしも、更に其効なかりき。

希臘の文學、哲學、技藝等も、また一時盛に學習せられ、シピオの如きも、希臘風を羅馬に導かんとせる主動者たりき。此等の刺衝により、拉丁文學漸く萌芽したれとも、羅馬の人心もと實際的なれは、其文華は、希臘の如き爛熟たるに及ふ能はさりき。

第三章　共和時代

(一)　內訌

東西諸州に於ける戰勝は、羅馬に利する所多かりしと共に、また害毒を流したることも少からす。かく羅馬の宏圖を成せる所以の士風滅ひて、德義衰頽し、華奢淫靡風をなすに至り、賄賂公行、官吏は私曲を弄し、而して當時羅馬の制たる、官吏は俸給なく、且つ官吏たらんか爲めには、大に資財を費さゝるを得さるより、政府の要職は、概ね富者の占む

貧富懸隔

グラツス兄弟の主張す平民を

る所となる。加之、富者は土地を壟斷し、奴隸を用ひて之を耕作し、大に小農を壓せしかは、財產の不等甚たしく、從來國家の精神たりし中等社會消滅して、今や貴族平民の階級は、全く貧富の懸隔となれり。而して富者は貧者を虐けて顧みす、隨て共和の政廢たれて、富者の寡人政治漸く將に成らむとす。

抑、羅馬の繁榮は、其兵力の上に在り。而して兵たるものは、多少の資財あるものたるを要すれは、かく農夫の衰ふるは、即ち羅馬國を衰へしむるものなり。此時に當りて、赤手を以て平民の爲めに、よく頽瀾を挽回したる者をナベリウス、グラックス(Tiberius Gracchus)となす。選はれて護民官となり、土地等分の說を唱へ、一人の所有すへき公地を一定し、之に超ゆるものは、沒收して貧民に分配せしむるを計り、紀元前百三十三年、法案となりて用ひられんとす。富人の黨憎みて之を殺しゝかとも、此說は依然として滅せす。後十年にして、其弟カイウス、グラックス(Caius Gracchus)護民官となり、その志を紹きて、益平民の爲めに盡す所

あり、富人黨また襲ひて其黨人を戮す。グラックス逃れんとしたれとも、追躡急なるを以て途に自殺せり。

グラックス兄弟、皆平民の爲めに盡せりと雖も、二人の所志小異あり。兄は貴族院の特權を破りて、之を平民議會に分たしめんとし、弟は更に一歩を進めて、イタリア人をして羅馬市民と同等の權利を得しめんとす。故に富者を敵とするの外、更に羅馬人を敵としたるものなり。

かく富人、羅馬平民、イタリア人の三黨、相軋轢する間に、軍將マリウス(Marius)と云ふもの、軍功によりて人望を得、而して此マリウスは、イタリア人の黨に左袒して盡す所あり。更に羅馬管下の民を其黨に入れて、勢威を張らんと欲し、其歡心を買はんか爲め、これにも同しく市民の權を得しめんとせしも、事成らす。サベリ種の諸族、戈を執りて起つに至り、羅馬の爲めに壓服せられたりと雖も、これより管下の民皆選擧權の外は、悉く羅馬市民と同等の權を有するに至りたり。之を社會戰爭といふ。(紀元前九〇年—八八年)

社會戰爭

かく内國に於て擾亂あるの間に於て、外に於ても、また東方に一大敵見はれたり。之を黑海の濱ポントス(Pontus)王ミスリダテス(Mithridates)とす。王は、ハンニバルの如く、希臘、小亞細亞を同盟して、羅馬より獨立せしめんことを計り、西亞細亞に在る羅馬人八萬を殺戮し、羅馬同盟の諸州を略す。是に於て、羅馬は兵を出して之を征せんとし、マリウス(Marius)は富人の黨魁シュルラ(Sulla)と、將帥の職を爭ひしに、シュルラ選はれたりしかは、マリウスは、其民を糾合して、之を妨けんとせしも、シュルラの手兵の爲めに擊破せられ、遂に亞非利加に遁れ、シュルラは、兵を率ゐて東征の途に上る。(紀元前八七年)マリウス、其隙を窺ひ、兵を集めて本國に歸り、執政の職に上り、シュルラの黨を虐殺せり。既にしてマリウス死せしかは、その黨シンナ(Cinna)なるものを仰ぎて首領となし、猶餘勢を保ちたりしも、武功の以て兵士の威望を繫くに足るへきものなかりしかは、後漸く衰へ、カイウス、ポムペイウス(Caius-Pompeius)と云ふもの出て、その父の軍功の遺澤によりて、勢望を得、マ

マリウスとシュルラとの隙

リウスの黨を離れて形勢を觀望せり。

此時シユルラ先つ希臘に入り、小亞細亞に轉戰し、紀元前八十七年より八十四年まで、屢ミスリダテスの軍を破りたりしか、內國の變を聞き、ミスリダテスと和し、急に師を班して本國に歸り、下伊太利より羅馬に攻入し、マリウスの黨と戰ひてこれに克ち、終に終身の都督となり、黨人の碑をたてゝ、悉くマリウスの黨を撲滅し、爲めに殺さるゝもの無數、甚た悲慘を極む。その僅に逃れしもの、西班牙に入りて、別に政府を建てゝ降らす、

マリウスの黨の撲滅

(二) ポムペイウス

シユルラか主權を總攬してより、政府の全權は富人の手に入り、平民の勢力全く地に墜ちたり。既にしてシユルラ逝き(紀元前七八年)勢望ポムペイウスに歸す。既にして、ポムペイウス、富人黨の領袖となり、西班牙のマリウス黨を討ち、これを滅絕して(紀元前七二年)國に歸り、名聲益高く終に選はれて執政となれり。

ポムペイウスの執政

ポムペイウスは、內亂を鎭靜せんか爲めに、平民議會の權を恢復し、又親ら海陸の軍を總督して、當時地中海上に徘徊せる海賊を剿絕し、更に進みて小亞細亞に入る。蓋し是より先きシユルラの兵を班すや、ミスリダテスまた兵を擧け、羅馬領を侵略し、勢燄甚た熾なり。是に至りて、ポムペイウスは、進みて大にこれをユーフラテス河畔に破りて、ポンタスを屬州とし、更にシリアを討ちて全く之を征服し、其地を沒して、之を羅馬の版圖となし、シリアのセリユーシデ朝(Seleucidae)こゝに滅ひしか、紀元前六十四年、ポムペイウスは、パルシア(parthia)と和を講して、これにシリア、アルメニアの東部を與へ、更にパレスタインの內治に干涉して、勢力を此に植つ。かくの如く西亞細亞を平定して羅馬に凱旋せり、

小亞細亞の平定

是より先き、ポムペイウスの在らさるや、黨爭益甚たしく、上にはポムペイウスに反對なるクラッシユス(Crassus)の一黨あり、下にはマリウスの殘黨あり。シーザー(Caesar)といふもの其首領たり。又シユルラの舊

將士の一黨の、當時に不平なる者あり、カチリン(Catiline)といふもの首魁たり。シセロ(Cicero)といふもの、才幹ありて、ポムペイウス東征の後、執政となる。カチリン爲めに執政たるを得ず、終に其黨を以て叛せしに、成らずして殺されたり。ポムペイウスの、既に東征より歸るや、カトー等一派の當局者と議の合はざるあり、終に翻りてシーザーと相結託するに至れり。

シーザーの勢威

(三) 第一三雄同盟及ひシーザー

シーザーは、マリウスに續きて其黨に首魁たりし彼のシンナの女婿たり。人民の聲望を負ひ、既に嶄然として頭角を現はせり。ポムペイウス之と姻親を結ひ、更にクラッシュスを誘て、其黨に入らしめ、以てカトー等に對す。史に所謂第一三雄同盟(First Triumvirate)なるものこれなり。(紀元前六〇年)。

翌年シーザーは、ポムペイウスの輔翼によりて執政に上り、期滿つるや、出て丶最も治め難しと稱するアルプス山南北の地なるゴールの知事となり、職に在ること前後十年、其間兵を養ひ功を樹て丶、以て他日の地歩を作らんと欲し、全くゴールの蠻民を壓服し、再ひライン河を渡りて獨逸に入り、二回海を渡りて、英國に上陸して、其大半を征し、爲めに大に羅馬の民心を得て、聲譽赫々として愈にポムペイウスを凌かんとす。

クラッカスの戰歿

時にクラッシュスは、全西亞細亞昔日のアレキサンダー王の版圖を、悉く羅馬の版圖に入れんことを圖り、パルシアを伐ち、其勢鋭を挫かんと欲し、シリアの太守となり、シリアに入りてパルシアと戰ひ終に紀元前五十三年メソポタミアに戰歿せり。此時より以來、パルシアは屢羅馬の爲めに襲はれたりと雖も、之に克ちて其獨立を保ち、紀元二十六年終に滅亡するに至るまで、故波斯帝國版圖の東部の地に割據せり。かくて三士の中に就て、クラッシュスは、既に死し、シーザー及ひポムペイウス二人となりしか、ポムペイウスは、シーザーかゴール地方にありて、其勢威薫灼已を凌かんとするを見て、妬忌の念を生し、職を褫

シーザーポムペイウスを攻むる

ポンペイの敗死

ひて、其權力を凌かんとしたりしかは、シーザーは、其手兵を率ゐて、北中央以太利の境なるルビコン河(Rubicon)を渉りて羅馬に入らんとす。過くる所風を望みて降り、ポムペイウスは希臘に逃る。シーザーは既に羅馬に入り、再ひ出て丶、當時ポムペイウスの所領たりし、西班牙地方に入りて、之を征服し、更にポムペイウスを逐うて希臘に入り、テッサリーのフルサリア(Pharsalia)に戰うて、(紀元前四八年)大にポムペイウスの軍を破るポムペイウスまた走りて埃及に入り、トレミーの朝廷に投せんとせしかは、シーザーは、更に追擊して、アレキサンドリアに至りしに、ポムペイウスは、既に埃及王の爲めに殺されたるを以てシーザーは厚く之を葬り、埃及に留まること數月なりき。時に埃及の女王、クレオパトラは、其國習により、弟と婚し、相並ひて王位にありしか、二人不和あり。シーザーは、クレオパトラの容色を愛し、之を援けて、其弟を伐ち、終にクレオパトラをして、獨り王位に即かしむ、かくの如くにして、羅馬は此國にも、其權勢を及ほし、內事に干涉するに至れり。

シーザーは大總督となる

シーザーの治績

シーザーは殺に遇ふ

有名なるアレキサンドリア文庫の焚燒せしも、實に此內訌の時にあり。」シーザーは、ポムペイウスの殘黨の亞非利加にありしものを伐ちしに、カトー、シピオ等敵せすして皆自刄し、シーザーは、軍を班して再ひ西班牙に入り、ポムペイウス黨の餘燼の再燃せしを討ち、之を剿絕して、(紀元前四六年)羅馬に歸り、遂に全羅馬帝國の大版圖を統轄して、終身の都督となり、更に大總督(Imperator)の號を受け、文武の大權を總攬し、萬機を親らす。諸種の議會ありと雖も、皆其鼻息を仰きて、頤使に任したれは、殆と獨裁の君主に異ならす。

シーザー既に位に上りて、人心を收攬し、農商を奬勵し、殿宇を建て、劇場を造り、公會堂を宏壯にし、星曆を改良し、其功績枚擧に遑あらす。其他、羅馬市民の特權を推して北以太利の民に及ほし、又積弊たる朋黨を滅はして、國民の一致を計りたり。

シーザーは、雄心禁せす、復た波斯を征して、羅馬の版圖を更にユーフラテス以東の地に擴めんと欲し、因て王號を稱して、以て東洋國民に

君臨するに利せんとせしも、羅馬の舊慣の許さゝるを憚り、未た之を口にせず。而かも羅馬の舊族にして共和政と因緣深きの徒シーザーか野心を看破し、羅馬の古共和政の自由を破壞するものなりとし、紀元前四十四年三月十五日、終にこれを元老院中ポムペイウスの像前に於て刺殺せり。ジュニウス、ブルトス(Junius Brutus)及ひカイウス、カッシウス(Caius Cassius)實に其魁首たり。ブルトス、もとシーザーを善し、シーザーの刺さるゝや、二十三創を被り、猶仆れず、ブルトスの群中にあるを見て、ブルトス、汝も亦かと叫ひ、終に死す。

(四) 第二三雄同盟

ブルトス等の、既にシーザーを斃すや、以爲らく、既にシーザーを倒す、以て專制者を除き得て、蹂躙せられたる諸議會の權利を恢復し得へしと。然るに、當時元老院内には、アントニウス(Antonius)牛耳を握り、武人の間には、レピドス(Lepidus)勢望ありて、共にシーザーの同志たりしかは、元老院は、シセロ等一輩の反對にも係はらす、二人の意を迎へ、シーザーの遺言を遵奉して、敢て改めず。アントニウス、レピドスと結託して、勢威漸く熾なり。後、シーザーの嗣オクタヴ#アヌス(Octavianus)と結合し、第二三雄同盟また成り、敵黨を殺戮す。ブルトス、カッシウス逃れて希臘に走り、兵を集む。オクタヴ#アヌス、アントニウス之を攻めて、ヒリッピ(Philippiスレースに在り)の野に破る。カッシウス先つ死し、ブルトス亦自刎す。世にブルトスを羅馬人物の最終者といふ。是に於てアントニウス及ひオクタヴ#アヌスは、羅馬版圖を東西に分ち、アントニウス東を得、オクタヴ#アヌス西を得、而してレピドスは、僅に亞非利加の屬州を得たりしも、忽ちにして之を失ひ、是に因て舊羅馬領と舊希臘領と相分る。既にしてアントニウスの東征するや、埃及に至りてクレオパトラの容色に溺れ、終に之と婚し、アレキサンドリアを首府とし、其生子をシリア及ひ波斯の王とせんとせしより、羅馬の民之を憤り、オクタヴ#アヌスをして往きて征せしむ。アントニウスは、フェニシア、埃及の艦隊を率ゐて、伊太利の軍を逆擊せんとし、希臘に上陸して、こゝに

羅馬人物の最終者

オクタヴィアヌス大督となる

戰ふこと數次、其海軍遂にアクチウム(Actium)に敗れて、埃及に逃れ歸りしも、又敗られ、遂に自刄す。クレオパトラも、亦次きて死し、埃及は、羅馬の屬州となり、オクタヴィアヌスは、羅馬の全版圖を有したり。當時地中海沿岸の地にて、羅馬の版圖に入らざるもの、唯亞細亞に猶太、亞非利加にモーレタニア(Mauretania)あるのみ。

オクタヴィアヌス羅馬に還り、大總督に陞りしか、紀元前二十七年、新號をうけてオーガストス(Augustus)といふ、至尊至高の義なり、是に於て羅馬の共和政體は變して、君主政體となれり。

第四章　帝政時代

(一)　オーガストス

マリウス、シユルラ以來、帝國の紛亂相次きて、定まらざること茲に百餘年、人心漸く亂を厭ひ治を思ふ。ときに愛國の士、才幹の人は、悉く死し、存せるものは姑息偸安のもの丶みなれは、オーガストスは、容易に政權を握るを得たり。然れとも、猶王者の號をとらす。共和政の外形を存せりと雖も、諸多の顯職を一身に兼ねて、國家の實權を總攬し、執政官たり、護民官たり、法敎長官としては國敎を監督し、大都督としては兵馬の權を司り、諸種の議會は依然たれとも、唯オーガストスの欲する所に從ひて決するのみ。人民は、依然として執政官及ひ諸他の官吏を選擧すれとも、實はオーガストスか、其一味を推擧するを嫌はす。

オーガストスの實體

此の如くにして、其名號は、依然たるシーザーなれとも、その實權は、伯父シーザーにも超えたり。オーガストス死するの後と雖も、國民漸く一君の政に狃れ、純然たる君主政の實をなすに至れり。

羅馬府の盛大

羅馬帝國か、外最大なる版圖を有し、內最高なる文華に達せしは、實に此時にして、其版圖、北は英海峽、北海、ライン、ダニューブ、黑海より、東はユーフラテス河及ひシリアの沙漠に至り、南は亞非利加のサハラ沙漠西は太西洋に至り、之を西(歐羅巴)、東(亞細亞)、南(亞非利加)の三部に分ち、更にこれを二十七州に小分し、諸州には到る處に道路を開きて、羅馬との交通を便にし、羅馬は其中心たり、其首府たり。其周圍二十哩に及

ひ、三十門を開き、市中には水道を通し、殿堂、劇場、浴室等、輪奐の美を極め、實にオーガストスの自ら誇揚せるが如く、瓦造の羅馬は、今や一變して大理石の羅馬とはなれるなり。當時羅馬の開化は、希臘風を雜へたる羅馬風にして、羅馬主權の到る所、其化の及はさる所なく、西は中央歐羅巴のケルト種族より、南は亞非利加の民に至るまて、羅馬希臘風(Roman Hellenism)の感化に影響せらる。而してアドリアナック海以西には、羅馬風主として行はれ、羅甸語を話し、殆と羅馬化せられたれとも、アドリアナック以東希臘殖民地のありし所、アレキサンダー王版圖の及ひし所は、希臘風猶餘習を存して、唯政治的に然らさるものあるのみ。而して當時に在りては、希臘語、又は羅甸語を話し、羅馬希臘風生活の中心たる、羅馬府の思想習慣に通するは、一般人士の冀望なりき。當時羅馬版圖の住民一億と稱す。オーガストスは、實に一億民衆の望を一身に負ひたるものといふへし。

然れとも、當時歐洲中土の民にて、なほ羅馬の麾下に來らさるものあり。即ち今のゼルマン地方にゼルマン種なるものあり。其事とする所、戰鬪と狩獵とのみにて、甚た不羈を愛す。其戰を好むや、城市の中に平靜の生涯を送るを屑とせすして、實に定居なき游民たり。一たひオーガストスの爲めに征服せられて、其屬州となりしも、知事の壓虐に堪へすして、ヘルマン(Hermann)といふもの出てゝ諸族を糾合し、叛旗をあけて、羅馬の兵をトイトブルグ(Teutoburg)に鏖殺したり。これによりてオーガストスは、再ひ之を伐たす、遺訓して不征の地となし、更にその侵寇を禦かむか爲めに、ライン及ひダニューブの河邊に沿ひて、大に堡壘を築かしめたり。

不征の地

また東方にパレシアありて、勢威猶熾に、數羅馬の領地を侵略し。僅にユーフラテス、チグリス二河を以て之と境を分てるのみ。

(二) 耶蘇教の傳來

オーガストスと時を同うして、猶太の一小村に耶蘇基督なるもの降誕し、一宗を開く。羅馬帝國の治世の間に、其教歐洲各國に傳播す、蓋し

上代に於て西洋史に重大の關係を有するもの三あり。希臘は文學技藝を以てし、羅馬は政治法律を以てし、ヘブリュウは宗教を以てす。此三者の中に就て、歐洲に影響を及ぼせる最大なるものは、實に此ヘブリュウに發達し來りし耶蘇教なりとす。

今翻りて當時各國の宗教界を考ふるに、各邦いつれも特殊の宗教を有して、唯バアル教の較く廣く傳播して、アッシリア、バビロン、シリア、フェニシア殖民地のカーセーヂ、西班牙、ゴール、希臘、シシリー、北亞非利加等の一部に信仰を有するあるのみ。かくの如く、各國其宗教を異にするは、政治上の統一に便ならざるを以て、アレキサンダー王は、諸宗教を雜糅して、新に一多神教をつくり、以て其版圖の間に行はしめんとせしも、其死して版圖分裂すると共に、埃及、シリア等の諸王、各、其國特有のものを奉するに至り、毫も効を見ることなかりき。而して當時希臘風感化の大なる、此等諸國の宗教、之をその特有といふと雖も、また之に希臘の諸神を混せるを免れざりき。

羅馬共和政の間に在りては、アレキサンダー王の遺圖を追ひ、征服せる諸州特有の諸神を、悉くナペル河畔に奉祀し、而して之と共に羅馬固有の祭儀と、宗教思想とを屬州の間に傳播せしめたり。然れとも、その計畫は、以て諸宗教を結合するに足らずして、畫餅に歸せり。

オーガストス、赫々の威望を以て、四海に君臨するに及ひ、隱々の間に、羅馬諸屬邦の民心に浸染し來りたる羅馬古宗教の特異なる思想、終に皇帝膜拜の習を養成するに至れり。

セネカの主義

時にセネカ(Seneca)といふもの、内に猶共和自由の主義を懷き、當時の狀勢に慊焉たるより、ストイックの哲理により、皇帝膜拜の無稽にして笑ふへきを說きたり。而してまた斷として、皇帝膜拜の當時の習に從はさる一小族あり。猶太是なり。

猶太人の離散

當時猶太人民は、離散して其足跡殆と到らさる處なく、バビロン、シリア、アレキサンドリア及ひ小亞細亞、希臘等、異宗教者の間に在りて、固く一神教を執りて、他と相交はらす。羅馬の、バレスタインに其政權を

基督の開宗

行ひて課稅するや、猶太の民服せずして屢叛きけれとも、勝たず。唯神託を奉し、天神の神子(Messiah)を遣はして、此民を拯ひ、再ひ猶太の新王國を建てゝ、全世界を服從せしむへしと信せり。

時に耶蘇基督、ナザレ(Nazareh)に生れ、自ら神子なりと稱し、新に教を開き、一視同仁の義を說きしか、その舊來の宗旨を攻擊して、其弊害を改めんとせしより、異教者なりとして磔殺せられ、其教を奉せるものは、猶太の官府の爲めに惡まれ、虐待を受けたれは、國外に逃れて、シリアのアンチオック(Antioch)に避難せり。而して弟子等は、四方に散して、其教を擴む、之を使徒(Apostles)といひ、基督の言行を蒐めて、之を其經典とし、新約全書といふ。舊約全書に對して、之をいへるなり。

當時羅馬の一統より、各國また相敵視せず。而してまたストイック哲學の此間に行はれて、全人間は一市をなさざる可からすと敎ふるあり。耶蘇敎の四海兄弟の宗旨か、人耳に入り易かりしは、蓋し疑ふ可からす。

ポーラスの布敎

使徒の間に在りて、最も有名なるものをポール(Paul)といふ。東方諸國を歷遊して、その法を說けり。ポールか其敎義を說くや、常に希臘哲學の理を籍り來れり。これ即ち新敎義を粧ふに、希臘思想を以てしたるものにて、これによりて大に耶蘇敎の傳播をたすけたり。ポールは、後羅馬に來りて法を說きしか、ネロ(Nero)皇帝の爲めに殺されたり。

チロ帝の暴虐

(三) オーガストス朝の末世

オーガストス帝室の末帝にして、オーガストス四代の孫なり。チロは、殘忍にして殺を好む。嘗て羅馬に大火あり、延燒九晝夜に及ぶ。帝高樓にありて、置酒宴游、之を邮むの色なし。よりて民皆帝の之を燒かしめたるを疑ひしかは、帝は此惡評を避けんか爲め、罪を基督敎徒に歸して、之を虐殺せり。帝の暴虐此の如くなるのみならず、將帥の權を奪はんとせしより、西班牙に鎭せる將士先つ叛し、其統領ガルバ(Galba)進みて羅馬に入る。チロは逃れんとして途に殺され、ガルバ立ちて帝となりしも、人望なくして弑せられ、オッソ(Otho)といふもの選はれて立ち

ヴェスパシアヌス帝セルサレムの堂を毀つ

ツラージャン帝の治

し、日耳曼藩鎮の將ヴィテリウス(Vitellius)、伊太利に入りて之を廢し、自ら帝位に即きしに、シリア藩鎮の將ヴェスパシアヌス(Vespasianus)と云ふもの、又帝を稱し、兵を遣はして羅馬を陷れ、紀元六十九年終に即位す。

帝善良にして紀綱復た振へり。時に猶太の民屢叛せしかは、紀元七十年、遂に兵を遣はし、ゼルサレムの堂を毀つ。此堂や、實に猶太人民の一致と其信仰とを繫ける惟一の氣脈にして、此堂の破壞は、實に此民人に痛打を與へたるものなり。

帝チトス(Titus)、また温良にして國家大に治まる。かのヴェスヴィウス火山(Vesuvius)の破裂して、ポムペイ、ヘルクラニュム(Pompey, Herculaneum)二府の埋波せしは、紀元七十九年にして、實に帝の治世中にありき。

爾來相續きて天下靜謐を極め、且つ諸帝王皆文物を好み、技藝を愛し、文運一時興隆せり。殊にツラージャン(Trajan)帝は、諸帝王中に於て、最も英明と稱せられ、西の方パルシアを討ちて、アルメニア、メソポタミア、アッシリア等を羅馬の屬州に加へ、名聲一時に高し。有名なる史家タシトス(Tacitus)もまた此時に生れたり。

又エーリウス、アドリアヌス(Aelius Adrianus)帝の如き、親ら東西を歷游し、其朝に名士輩出せり。最も著名なるを、希臘のプルターク(Plutarch)とす。其史傳の著書廣く世に行はる。

帝の時猶太また叛す。討て之を平らげ、終にゼルサレムを燒き、猶太人を放逐せり。

マルクス、オーレリウス(Marcus Aurelius)帝も、亦文武の才を兼ね、躬らストイックの哲學に心を潛め、またゼルマン種族を疆外に逐ひたり。羅馬の開化は、帝の時に其極に達し、帝政もまた帝の時より、漸く衰ふるに至れり。

(四) 當時羅馬の開化と道德

此時に當りて、羅馬は泰平日久しく、開化の進歩驚くへし。文學技藝は更にもいはず、商業は昌え、貿易は盛に、諸都府の繁榮、實に目を駭かす

に足る。又庠序文庫の設ありて、教化僻陬の地に及へり。然れとも、奢靡の風又之に伴ひ、道德は弛廢し、剛毅廉潔の風復た見る可からす、恬安に慣れて、唯游戯に心を蕩かし、游浴觀劇盛に行はる。殊に喜劇の最も盛なりしか如き、また奴隷を使用することの夥多なりしか如き、以て當時の人心を想見するに足る。

されは、詞人文士にして、當時の澆季を諷刺したるもの少からす、熱罵にはペルシウス(Persius)あり、冷嘲にはジュヴェナル(Juvenal)ルシアン(Lucian)の徒あり。

第五章　羅馬の衰運

(一)　武人政治及ひコンスタンチン帝

マルクスオーレリウス帝(紀元一六一年―一八〇年)以後、羅馬は漸く衰運に向ひ、内には各地駐屯の兵士、各其將を擁して帝位に即かしめ、擅に之を廢立して、專横を極む。紀元百九十二年より二百八十四年に至る九十二年間に、帝位に登るものすへて二十五人、殊にアレキサンダー、セヴェルス(Alexander Severus)帝の死後の如き、紀元二百三十五年より二十年間に、十二帝の多きを出たすに至れり。

此時、外には、東にアルドシール(Ardshir)と云ふもの出て、セヴェルス帝の時、パルシアを滅ぼして、新波斯國を建て、威を東方諸邦の上に振ひて、屢羅馬の所領を侵略するあり。北にはゼルマン族の一部ゴス(Goth)民種の居をダニューブ下流の地に占め、また屢羅馬の北疆に寇するあり。

版圖の分割

勢此の如くなれは、羅馬帝國は、國勢日に陵夷して復た振はす。ディオクレシアナス帝(Diocletianus)位に即くに及ひて、帝權を伸張し、軍人を壓服し、元老院の權力を剝き、外觀を壯大にして、人民を威服し、在位二十年、勵精治を圖れり。又禦寇に便せんか爲め、版圖を分割して、帝は自ら東方に主として小亞細亞に居り、ガレリウス(Galerius)と云ふものを副とし、更にマキシミアナス(Maximianus)と云ふものをして、以太利のミランに都して西帝たらしめ、コンスタンチウス(Constantius)を副帝

コンスタンチウスの一統

コンスタンチンの一統

となしたり。帝の死後内訌忽ち起り、終にコンスタンチウスの子コンスタンチン(Constantine)起りて、マキシミアナスの子を逐ひ、羅馬に入りて、西帝國に君臨し、更に東帝國を征服して、終に再ひ全帝國を統一し、都を黑海濱のビザンチューム(Byzantium)に遷して、コンスタンチノープル(Constantinople)といふ。コンスタンチンの城市の義なり。

耶蘇教傳播の因

帝の母は、耶蘇教を信せしかは、帝も幼より之を奉し、且つその天下を得るに當り、同教徒の後援を得ること多かりしを以て、其既に位に即くや、耶蘇教を以て國教とし、寺院を建て、寺領を附し、僧侶を免稅したりしかは、是より耶蘇教大に傳播せり。

(二) 耶蘇教の傳播

從來、耶蘇教徒は、異教徒と相交はらす、且つ其一神教たるの故を以て、羅馬從來の多神教と相容れす、從て耶蘇教は、常に羅馬皇帝の虐待を受けたり。然れとも、一難を經る毎に、熱心信仰の情益〻奮きを加へ、信徒は益〻增加し、コンスタンチン帝の時に至りては、羅馬全帝國に盈ちたり。且つ當時既に教旨の見解に關して異論を生し相確執せしかは、コンスタンチン帝、乃ち紀元前三百二十五年、大に僧侶をニケイア(Nicaea)に會して、信仰箇條を制定して、これを寺院の眞信條として、これに據らしめ、(此會議をニケイアの會議といひ、此信條をニケイアの信條といふ)而してこれに違ふものは異端とし、國家の權勢によりて信仰を强ふること、こゝに始まれり。而して此破門せられたる僧徒等はゼルマン種族の間に行きて宣教せり。

ニケイアの信條

かく國教となりて保護を受くるに至れると共に、其禮拜の法、やゝ變して漸く華美を衒ひ、儀式漸く繁縟となり、且つこれと共に、當時道德の敗壞に反動して、高踏隱逸の風漸く生し、尋て僧院(モナステリー)(Monastery)制の萠芽を見る。

コンスタンチン帝殂せし後、ジュリアナス帝(Julianus)位に即く。帝は、希臘の古哲學を嗜み、羅馬の古宗教を興復せんことを務めたりしも、その性の温良なる、血を灑きて之を遂けんとするの愚を學ふに至らさ

りき。

爾來諸帝闇弱、加ふるに蠻夷の侵寇甚たしく、國政大に紊亂せり。セオドシウス一世(Theodosius)(紀元三七九ー三九五年)の時に及ひて、嚴刑を以て舊來の神祇を禮拜するものを罰して、規定の信條を奉せしめしかは、一神教は今や全く羅馬帝國の公教となれり。

帝死して、東西羅馬は全く分裂して、また一統せす。蠻民の侵寇甚たしく、昔日羅馬の勢威全く地に墜ちぬ。

第六章　蠻民の移住

(一)　總說

羅馬の末年を攪亂して、終に世界の大局に一大變動をなさしめたるものを、蠻民の移住となす。今此事を說述するに先ち、少しく前に溯りて、歐洲蠻族割據の狀態を說かさる可からす。

抑歐羅巴に據れる人種は、アリアン族中の希臘人、拉丁人、ケルト人、チュートン人及ひスラヴニア人の五種たることは、既に總論に說けるか如し。而して上古に在りては、重もに希臘人、拉丁人、大局の主動者として、他の三族は、未た史上に現はれす。

蓋し太古アリアン族の、中亞細亞の搖籃地より歐洲に移住し來るや、この五種中、最も先に來りしは、今日の所謂ケルト人にして、其初め中央歐羅巴の地に卜居せしか如し。而してチュートン人之に次きて來り、ケルト人を西部歐羅巴に逐ひて、自ら東部及ひ中部歐羅巴の地に據有せり。既にしてスラヴニア人又東部歐羅巴の地に現はれたり。チュートン人は、爲めに漸く中部及ひ北西歐羅巴に遷りたるものゝ如し。而して希臘人及ひ拉丁人の歐羅巴に來りしは、チュートン人の前たるか將た之に後れたるか、詳ならすと雖も、此種の民は、早く開明の域に達せしも、他の三人種は、依然として蒙昧野蠻の境を脫する能はす、羅馬共和政の時に及ひて、ケルト種中のゴール人、其最も羅馬に接近して住するの故を以て、最も早く羅馬の文化に浴し、羅馬の末年に及ひては既に全く拉丁風に化し、且つ基督教を奉せり。

スラヴニア人の史上に現れたるは、最も近くして、當時に在りては、猶記すへきなし。チュートン即ちゼルマン人中に在りて、第一に羅馬の感化を受けしは、ゴス人にして、此人種は、其初めスカンディナヴィア(Scandinavia)の地に住したるものゝ如く、紀元二百年の頃より、南下して中部歐羅巴に來り、當時既に分れて、ヴィシゴス(Visigoth即ち西ゴス)オストロゴス(Ostrogoth即ち東ゴス)等の別あり。

蠻民割據の狀

かく蠻人か、漸次に勢力を增加し來りたる所以は、是より先き、オーガスタス帝の時、紀元九年其兵ゼルマン蠻族に敗られし以來、羅馬は、常に嬰守の地に立ち、これに加ふるに、當時羅馬の士氣衰頽し、且つ飢饉惡疫等の爲めに人口減して充分の兵を得る能はすして、其自衛の力の沈淪せしによるものなり。

今詳に、當時チュートン族各蠻民割據の狀を、地理上より考ふるに、東西ゴスは、バルチック海黑海の間を占め、その東にはアラニ(Alani)あり。上ライン及ひアルプス南方の地にはスエヴィ(Suevi又アレマニオAlemanio)あり。下ラインの地には、フランク人(Franks)あり。エルベ及ひライン兩河の間には、サキソン人(Saxons)あり。サキソン人とフランク人の東には、ロムバード人(Lombards)あり。サキソン人の北には、デーン人(Danes)、スカンディナヴィア人(Scandinavians)あり。北海の濱には、フリシア人(Frisians)あり。

羅馬東西に分る

此等蠻民は、波浪の如く、寄せては逐はれ、逐はれては寄せて、羅馬に注き來る。此時アリヤン族にあらさる一人種、東方より侵入し來り、爲めに一大恐慌を生せり。之を匈奴(Huns)となす。

匈奴の侵寇

(二) 匈奴の侵入

是より先き、羅馬帝ジュリアナスの死するや、久しからすして帝國二分し、ヴァレンス(Valence)は東を得て、コンスタンチノープルに居り、ヴァレンチニアナス(Valentinianus)一世は、西帝國を得て、ミランに居れり。此ヴァレンス帝の東方に君臨する時に當りて、匈奴初めて歐洲に侵入す。蓋し此匈奴は秦漢の時、屢支邦に侵寇せしものにて、後漢の爲めに逐は

西ゴス人の侵略

れて西し、先つアラン人を滅ぼし、東ゴスを征服し、進みて西ゴスの地に侵入して、之を畧せしかは、西ゴス人は、當時既に耶蘇教に改宗せしを以て、ヴァレンス帝の聽許を得て、ダニューブ河の南岸に避難するを得しかは、其恩に報いんか爲め、傭兵となりて、永く東羅馬の國境を禦くことを約せしか、羅馬の官吏これを虐待せしより、忽ち戈を倒にして、コンスタンチノープルに進む。ヴァレンス帝迎へ戰ひてこれに死し、ゴス人は、恣に西方の沃土に占據し、伊太利及ひアドリア海の境に及へり。

セオドシウス帝の武威

羅馬東西に分る

紀元三百七十九年、セオドシウス(Theodocius)選はれて東羅馬の帝位に登り、其武威蠻族を壓して、西ゴス人を服從す。また西羅馬帝國を戡定して、東西を統一せしも、其死するに臨み、(紀元三九五年)再ひ國を二分して、長子アルカディウス(Arcadius)を東方に、次子ホノリウス(Honorius)を西方に君臨せしめたり。蓋しセオドシウスの意たる、此の如く東西を分つも、全權はこれを長子に與ふるにありき。然れとも、二子共に幼

ゴス羅馬王を圍む

冲なりしより、其攝政權を爭ひて相下らす、西帝國の攝政スナリコ(Stilicho)は、西ゴスの歡心を買ひ、之を用ひて以て東方帝國を威嚇せんとせしか、既にしてその後患を遺さんことを憂へて、之をやめしかは、西ゴス王アラリック(Alaric)は、その違約を責めて、伊太利に侵入し、羅馬を圍みて、之を陷れしも、(紀元四一〇年)飢饉に逼られて、更に南進し、南伊太利を蹂躪す。是より先き、羅馬の陷りしとき、ホノリウス帝逃れて、ラヴェンナ(Ravenna)に在り、遂に西ゴス人と和を講せり。

(三) 西ゴス王國

西ゴス西班牙を占む

既にして西ゴスは、紀元四百十二年の頃にはガロン(Garonne)河よりエブロ(Ebro)河に至るの王國を建て、南西ヴァンダル人と境を交へ、北はフランク、東はバルガンディーと相接せり。然れとも、なほ此に饜足することを能はす、終にピレニース(Pyreneos)山を超えて、漸くヴァンダル人の疆を蠶食す。ヴァンダル人の亞非利加に移るに及ひて、終に今の西班牙の全部を占むるを得たりと雖も、フランクの爲めに、ピレニース山と

ガロン河との間の地を奪はれたり。

是より先き、ホノリウス帝既に死し、ヴァレンチニアン三世(Valentinian)その後を嗣き、エーチウス(Aetius)相たり。もと亞非利加の大守ボニフェース(Boniface)と善からず、エーチウスのゴスの力を借るに及ひて、ボニフェースは、ヴァンダル人を、西班牙より喚來りて、己を助けしめんとせしに、ヴァンダル人は、亞非利加に入るや、却てボニフェースを殺し、また羅馬の内訌に乘じて、カーセーヂを陷れて、之を首府とし、(紀元四三九年)シシリー等の諸島嶼を征服し、爾來北亞非利加を領すること、殆と百年の久しきに及へり。既にしてヴァンダルの酋長ガイゼリック(Gaiseric)は、更に匈奴の酋長アッチラ(Attila)と同盟して、將に西ゴス及ひ羅馬を伐たんと欲す。

アッチラの威望

(四) 匈奴王アッチラ

是より先き、匈奴は、ゴス人を驅逐して、自らヴォルガよりダニューブに至る兩河間の地を占領し、茲に留まれること殆と五十年、アッチラの時に及ひて、威四隣に震ふ。アッチラは、躬らタイス(Theiss)河畔に宮殿を建て、此に住し、名聲赫々、啻に歐洲にある匈奴全族のみならず、ゼルマン、スラヴニック等の諸族も、亦その命を聽けり。既にガイゼリックと相結託するや、先つダニューブ河を渡りて、東帝國に寇し、セオドシウス帝二世の和をきゝて、河の右岸の地を得、更に西してライン河を渡りて、ゴールに入る。エーチウスは、羅馬及ひ西ゴスの兵を合して、之をカタロニア(Catalonia今の東佛蘭西の地にあり)の野に迎へ戰ひて、兩軍鏖戰(紀元前四五一年)、十六萬の兵これに死し、西ゴスの王もまた斃れたり。アッチラ遂に敗れ走る。この戰や、實に東西兩人種の歐洲に於ける權勢を決すへき一大戰にして、波斯の希臘と戰ひたるマラソンの戰に比すへきものなり。

カタロニアの戰

アッチラの遠征

アッチラは、一たひパンノニア(Pannonia今の匈牙利)に歸り、翌年更に兵を新にして、アルプスを踰え、上伊太利に闖入し、到る處の都府を抄掠す。ポー(Po)河畔の沃野は爲めに荒蕪せり。時人相謂うて曰く、アッチラ

の軍の過くる所、地に綠草なし。此時アクレイア(Aquileia)も、また蹂躙せられ、其住民海濱の一小島に避難し、今のヴェニス府の基を開けり。

アッチラは、更に進みて、羅馬府に逼る。羅馬人、計の出つる所を知らず、羅馬の僧正レオ(Leo)一世、自ら出てゝ敵に諭し、貢幣を約して和を講せんとす。アッチラ、其兵の病に斃るゝもの多きを以て、これを容れ、軍を引きて去る。途ダニューブ河邊に至りて、急に病みて死せしかは、(紀元四五三年)其征服せし東ゴス、ロムバード等皆反し、大王國は、忽ち四分五裂して、王の雄圖は、流星の如く消え、匈奴は南露の高原に引去れり。

第七章　西羅馬の滅亡

既にして、エーナウスは、ヴァレンナニアン帝に惡まれて、其殺す所となる。(紀元四五〇年)ペトロニウス、マキシムス(Petronius Maximus)といふもの、帝を殺して(四五五年)、簒奪を謀る。皇后私に人を遣はしヴァンダルスを招來す。ゲンゼリック、カーセーザより海を渡りて羅馬に攻入し、抄掠破壞を極むること二週日に及び、財寶俘虜を載せて歸れり。

以太利の元首

爾來、西帝國は、其實權全く西班牙に在る西ゴス人の手裡に歸し、帝王の黜陟等、一に其意に出てさるなく、將士等各、己の好む所を奉戴して相爭ふ。ロミュルス、オーグスチュルス(Romulus Augustulus)帝の時に至りオドアセル(Odoacer)といふもの、蠻將より出てゝ勢力を得、東西二帝を立つるの要なきを說き、帝を廢して冕冠紫衣を東帝ゼノ(Zeno)に贈り、自らは伊太利の元首と號し、東帝の下に隷して、西羅馬帝國を統御せり。是に於て西帝國滅ふ。時に紀元四百七十六年なり。ヴァンダルス王ガイセリック、亦其翌年を以て死し、其國分裂す、後五十七年にして、東羅馬に併せらる、

西帝國滅亡

世運變遷の期

抑、西羅馬帝國の滅亡は、西史上に一大劃線を畫せるものにして、即ち從來歐洲南部にのみ溢れし文華の潮流は、これと共に、今や橫逸して、全歐洲に漲らんとす。西帝國の滅亡は、羅馬の文明を粉齏して、今日の種子を歐洲に撒したるものなり。上代の文明は、希臘に出てゝ羅馬に成り、羅馬は更に之を全歐洲に傳へたるものにして、從來の希臘、拉丁

人の文明は、此時變して、ゲートン種文明の發達となる。西羅馬國の滅亡と共に、上古紀は終りを告げて、ゲートン種の中央諸州に勢力を得るや、新邦國を建て新制度を創め、史壇こゝに改まる。史にこれを中代の世と稱す。

中等教科 西洋史卷一 終

中等教科 西洋史（改定）全三冊

定價 卷一 金三拾錢 卷二 金三拾五錢 卷三 金四拾五錢

明治廿九年八月廿九日印刷
明治廿九年九月一日發行
明治三十一年一月廿八日訂正再版印刷
明治三十一年一月廿一日發行

版權所有

編纂者 東京市神田區錦町三丁目二十四番地 原勇六

發行者 東京市日本橋區本町四丁目十六番地 小林義則

印刷者 東京市神田區小川町一番地 多田榮次

印刷所 東京市神田區小川町一番地 愛善社

發兌 東京市日本橋區本町四丁目十六番地 文學社

108
3
140

108
合3
140

003624−001−8

108−140

西洋史

原　勇六／編

M31

ACD−0212